茨城県教育財団文化財調査報告第318集

東前（ひがしまえ）遺跡

主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月

茨城県
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県は，21世紀の社会を展望し，県全域にわたる調和のとれた発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めています。

その一環として，茨城県竜ヶ崎土木事務所は，稲敷市大字時崎において主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業を計画しました。

しかしながら，この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である東前遺跡が所在することから，これを記録保存の方法により保護する必要があるため，当財団が同事務所から同遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託を受け，平成19年４月２日から同年５月31日までの２か月間にわたってこれを実施しました。

本書は，その調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもちろんのこと，郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして，教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県竜ヶ崎土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，稲敷市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年３月

財団法人茨城県教育財団
理事長　稲葉節生

例　　言

1　本書は，茨城県竜ヶ崎土木事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した，茨城県稲敷市大字時崎字東前605番地ほかに所在する東前（つかけまえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　査　　平成19年４月２日～平成19年５月31日

整　理　　平成20年７月１日～平成20年９月30日

3　発掘調査は，調査課長瓦吹堅のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　川村満博

主 任 調 査 員　花見勝博

主 任 調 査 員　井上琢哉

主 任 調 査 員　小室弘毅

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長村上和彦のもと，以下のものが担当した。

調査員	早川麗司	第１章～第３章第３節１～３・４(4)，第４節，写真図版
調査員	作山智彦	第３章第３節４(1)～(3)

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X＝－5,160m，Y＝＋41,920mの交点を基準点（A１a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C･･･，西から東へ1，2，3･･･とし，「A１区」「B２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ･･･ｊ，西から東へ1，2，3･･･0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は，次のとおりである。

遺構　SI－住居跡　SF－道路跡　SD－溝跡　SK－土坑　SM－地点貝塚

遺物　P－土器　TP－拓本記録土器　DP－土製品　Q－石器

土層　K－撹乱

3　土層観察と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の掲載方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は400分の１，遺構実測図は原則として60分の１の縮尺で掲載した。

(2)　遺物実測図は，原則として３分の１の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3)　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

＝焼土・赤彩　　＝炉・竈火床面・繊維土器断面

＝竈構築材・貝散布範囲・黒色処理　　＝炭化物・炭化粒子範囲

●＝土器　○＝土製品　□＝石器・石製品

5　遺物観察表・遺構一覧表の表記については，次のとおりである。

(1)　遺物番号は通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

(2)　計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。計測値の単位は，m，cm，gで示した。大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に単位を表示した。

(3)　備考欄は，土器の残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6　竪穴住居跡の主軸は，炉・竈を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例　N－10°－E）。

目　　次

序
例言
凡例
目次
概要……1
第１章　調査経緯……3
　第１節　調査に至る経緯……3
　第２節　調査経過……3
第２章　位置と環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　調査の成果……10
　第１節　調査の概要……10
　第２節　基本層序……10
　第３節　遺構と遺物……11
　　1　縄文時代の遺構と遺物……11
　　(1)　竪穴住居跡……11
　　(2)　地点貝塚……12
　　2　古墳時代の遺構と遺物……14
　　(1)　竪穴住居跡……14
　　(2)　土坑……62
　　3　平安時代の遺構と遺物……63
　　竪穴住居跡……63
　　4　その他の遺構と遺物……65
　　(1)　道路跡……65
　　(2)　溝跡……65
　　(3)　土坑……65
　　(4)　遺構外出土遺物……68
　第４節　まとめ……69
写真図版
抄録

【東前遺跡の概要】

【調査のあらまし】

東前遺跡は，稲敷市（旧江戸崎町）にある遺跡で，霞ヶ浦から西に約５km 離れた台地上に位置しています。平成19年度の調査は，主要地方道江戸崎新利根線バイパスの建設のために行われ，図面や写真などで遺跡の内容を記録する調査を行いました。

【調査の内容】

山林が切り開かれている場所が，今回の調査区です。縄文時代の竪穴住居跡１軒，地点貝塚１か所，古墳時代の竪穴住居跡18軒，平安時代の竪穴住居跡１軒などがみつかりました。

東前遺跡の上空からの様子

調査は，遺跡の上に積もっている土を機械で取り除くことから始まります。その後，残った土を人の手で取り除くと，貝殻のかたまりがみつかりました。

掘り込む前の貝塚

調査をすすめていくと縄文時代前期の第11号住居跡の中に，貝が捨てられていたことがわかりました。縄文時代前期は今より温暖な時期で，現在の平野まで海が入り込んでいたことがわかっており，霞ヶ浦の周辺にはたくさんの貝塚があります。縄文時代の人々は，貝が大好物だったのでしょう。

第11号住居跡に捨てられた貝

第４Ａ号住居跡の隅からみつかった土器

第４Ａ号住居跡は，今から約1,700年前の古墳時代のイエと考えられます。焼けた土や炭になった木材があったことから火事になったことがわかりました。また，当時の人々が使っていた，土師器という土器がたくさんみつかりました。

第４Ａ号住居跡の床からみつかった土玉

第４Ａ号住居跡からは土器のほかに，粘土を丸くこねて作った土玉と呼ばれるものが150点みつかりました。魚などを捕る網の錘や生活していくなかでおこなわれたオマツリに使う道具などといわれています。当時の人々は，いろいろな道具を使って生活をしていました。

【調査でわかったこと】

縄文時代前期の竪穴住居跡は，１軒しかみつかりませんでしたが，調査できなかった周囲にもある可能性が考えられ，ムラをつくっていたことが推測されます。貝塚からみつかった貝は，マガキ，ハマグリ，カガミガイ，ウネナントマヤガイ，アカニシ，ウミニナなどでした。現在のわたしたちが食べているものを，縄文時代の人々も食べて生活していたことがわかりました。

古墳時代のイエからは，炉と竈といった当時の炊事場がみつかりました。同じ時期のイエでも，炉を使用するイエ，竈を使用するイエ，両方使用するイエがあることがわかりました。

【むずかしい言葉】

竪穴住居跡　地面を掘って床をつくり，柱を立て，屋根をかけた半地下式のイエです。

地点貝塚　竪穴住居跡や穴などに貝殻などを捨ててできた小さな貝塚です。

土師器　古墳時代から平安時代につかわれた素焼きで赤褐色の土器です。

土玉　球状土錘とも呼ばれており，網の錘やオマツリにつかわれたとも言われています。

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

平成14年8月20日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長から，茨城県教育委員会教育長あてに，主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，平成14年8月28日に事業地内に東前遺跡が所在することや詳細調査の実施及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。茨城県教育委員会教育長は，平成14年10月7日，平成18年2月28日に現地踏査を実施した。平成14年11月1日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，試掘調査の対象範囲を回答した。平成16年10月19日，平成18年6月1・2日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成16年11月10日，平成18年8月21日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，事業地内に東前遺跡が所在する旨回答した。

平成18年9月19日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長から，茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第94条の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成18年10月13日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月22日，茨城県竜ヶ崎土木事務所長から，茨城県教育委員会教育長あてに，主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。平成19年2月26日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに，東前遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県竜ヶ崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成19年4月2日から平成19年5月31日まで，東前遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

調査は，平成19年4月2日から平成19年5月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

期間／工程	4月			5月		
調査準備 表土除去 遺構確認	■	■	■			
遺構調査			■	■	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■	■	
補足調査 撤　　収						■

第2章　位　置　と　環　境

第1節　地 理 的 環 境

東前遺跡は，茨城県稲敷市大字時崎字東前605番地ほかに所在している。

遺跡が所在する稲敷市(旧江戸崎町)は，茨城県南部に位置している。北は霞ヶ浦南岸に面し，東は横利根川，南は利根川を挟んで千葉県と境を接している。地形は，標高20～30mの稲敷台地と霞ヶ浦水系及び利根川水系の低地からなっている。市域の稲敷台地は，小野川の右岸が神宮寺台地，左岸が江戸崎台地と分けられている。小野川とその支流の沼里川と花指川流域の低地は，それぞれ小野川開析低地，沼里川開析低地，花指川開析低地と呼ばれており，台地を分断している。

当遺跡は，霞ヶ浦から西へ約5km離れた沼里川と花指川に挟まれた江戸崎台地の小舌状台地上に位置している。台地の縁は沼里川と花指川によって樹枝状に開析されており，舌状台地が南北に細長く延びている。遺跡は，その台地上の沼里川に面した標高28～29mの縁辺部に広がっており，調査前の現況は山林である。

第2節　歴 史 的 環 境

旧江戸崎町域では，旧石器時代から近世までの遺跡161か所が『茨城県遺跡地図』[1]に登載されている。ここでは，当遺跡周辺に分布している遺跡を中心に概要を記述する。

旧石器時代の遺跡は，秋平遺跡の1遺跡が登載されているだけであるが，中峰遺跡[2]<2>の調査で石器集中地点5か所，炭化物・焼土集中地点が確認された。安山岩，流紋岩，頁岩の石材を主体としたナイフ形石器，彫器，石核，剥片等が出土し，石器製作跡と考えられている。児松遺跡[3]<3>からも尖頭器，細石刃が出土している。

縄文時代の遺跡は，66か所が登載されている。縄文時代早期末から前期前半に最も海水面が上昇した縄文海進時には，今の霞ヶ浦水域や低地にも海が浸入していたことが貝塚の分布からうかがえる。霞ヶ浦周辺には，陸平貝塚，上高津貝塚，広畑貝塚，貝ヶ窪貝塚，興津貝塚など学史的にも有名な貝塚が数多くある。当地域における縄文時代の貝塚は23か所確認されている。当遺跡周辺には，沼田貝塚<1>，狸崎遺跡<5>，村田貝塚<6>，原南遺跡<7>，神田道貝塚<8>，塙遺跡<9>，寺山遺跡<10>，センゲン貝塚<11>，台畑貝塚<12>，吹上貝塚<13>，明神貝塚<14>，駒塚貝塚<15>がある。村田貝塚は，鹹水産のハマグリ，シオフキ，アカニシ等を主体とした前期から中期の貝塚である[4]。その他，集落遺跡として中道遺跡<16>，赤羽根遺跡<17>，立通し遺跡<18>，土戸古墳<19>，池台遺跡<20>，桜塚遺跡<21>，羽賀栗山遺跡<22>，豆薬師遺跡<23>，壹ノ上遺跡<24>，駒塚台上遺跡<25>，駒塚荒久遺跡<26>，佐倉原古墳群<27>，新山遺跡<28>，八幡台遺跡<29>，大門遺跡<30>，荒野遺跡<31>，芝ヶ谷遺跡<32>，栗山遺跡<66>がある。中峰遺跡では中期後葉の土坑，児松遺跡では中期後葉の住居跡1軒の他，陥し穴，包含層が調査されている[5]。

弥生時代の遺跡は，11か所が登載されている。当遺跡周辺には，立通し遺跡，塚本遺跡<33>，吹上貝塚がある。椿の谷古墳群[6]，大日山古墳群[7]，恩川遺跡[8]でも後期の住居跡が調査されている。なかでも大日山古墳群は，土器様相から集落の形成時期が中期後葉まで遡ることが判明するなど，弥生時代の様相も少しづつ明らかになってきている。

古墳時代の遺跡は，古墳を含む95か所が登載されている。当遊跡周辺には，東前古墳群<34>，亀台古墳群<35>，見明塚古墳<36>，山後古墳<37>，大日古墳<38>，亀ヶ谷城古墳<39>，荒地平古墳<40>，荒地古墳<41>，中城古墳<42>，木納場古墳群<43>，大塚古墳<44>，大塚山古墳<45>，外浦古墳<46>，新山西遺跡<47>，浅間山古墳群<49>，豆薬師遺跡，中峰遊跡，栗山遊跡，塚本遊跡，佐倉原古墳群の古墳・古墳群がある。楯の台古墳群は，7基中6基が調査され，後期古墳とされている[8]。姫宮古墳群は，6世紀後半以降の円墳が2基調査されている[9]。水神峯古墳は主体部が箱式石棺で，鉄地金銅張のf字形鏡板付轡などの馬具が出土し6世紀前半とされている[10]。その他，集落遺跡では，大夫屋敷遺跡<50>，辺田後遺跡<51>，自穐前遺跡<52>，原久保遺跡<53>，宮後遺跡<54>，時崎平遺跡<55>，神明平遺跡<56>，狸崎北遺跡<57>，原屋敷遺跡<58>，原山遺跡<59>，原迎遺跡<60>，佐倉原遺跡<61>，台畑貝塚，佐倉原南遺跡<62>，狸崎遺跡，堂ノ上遺跡，中峰遺跡，豆薬師遺跡，村田貝塚，栗山遊跡，駒塚貝塚，駒塚台上遺跡，駒塚荒久遺跡，中道遺跡，塚本遊跡，新山西遺跡，荒野遺跡，大門遺跡，芝ヶ谷遺跡，赤羽根遺跡がある。中峰遺跡[11]では前・後期，二の宮貝塚<65>，思川遺跡で後期，大日山古墳群で中・後期の住居跡がそれぞれ調査されている[12]。

奈良・平安時代の遺跡は，52か所が登載されている。律令期には信太郡に属し，当遊跡が所在する沼田地区は，子方郷内に比定されている[14]。当遊跡周辺には，大夫屋敷遺跡，中道遺跡，柿作台遺跡，辺田後遺跡，塚本遊跡，自穐前遺跡，土戸古墳，中峰遺跡，観音前遺跡<63>，池台遺跡，香取台遺跡<64>，二の宮貝塚，桜塚遺跡，駒塚貝塚，駒塚台上遺跡，佐倉原遺跡，佐倉原古墳群，新山西遺跡がある。

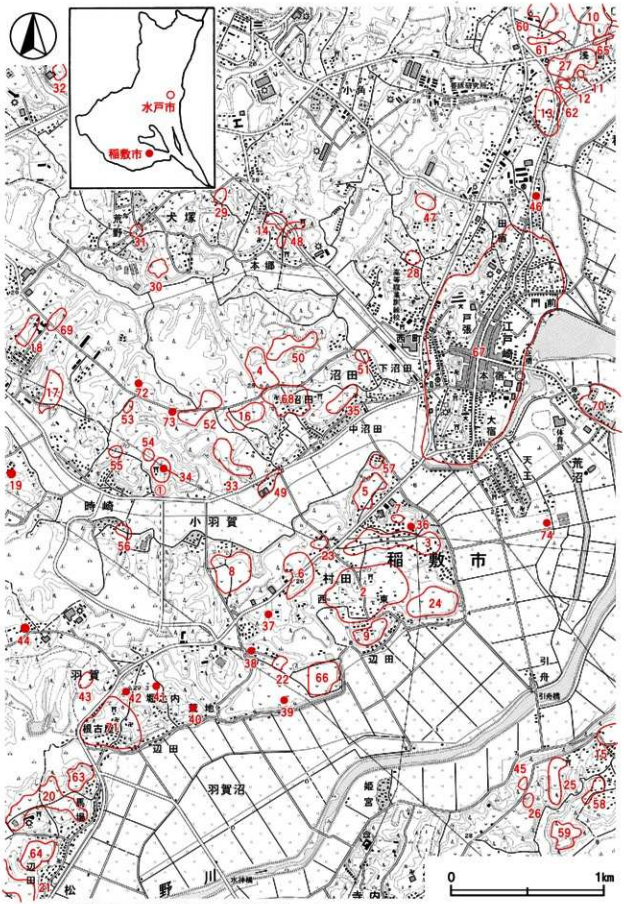
平安時代末期に郡の解体が進み，信太郡は小野川を挟んで東に東条庄，西に信太庄が立庄され，江戸崎は信太庄に含まれる。南北朝時代末期に，関東管領上杉氏の被官である土岐原氏が信太庄の惣政所として当地域に移住してくる。土岐原氏は江戸崎城<67>を居城とし，その支配は1590(天正18)年の佐竹氏による常陸国の統一まで続いた。当遊跡周辺の城館跡は，大塚遺跡<48>，沼田遺跡<68>，二重堀遺跡<69>，卿城遺跡<70>，羽賀城跡<71>，中峰遊跡がある。二重堀遺跡では，16世紀の土塁3条と堀跡2条が確認されている。また，二重の土塁と堀跡の南側からは，土橋を伴うL字形の区画溝が確認されている[15]。中峰遊跡では，地下式坑，火葬土坑，墓坑などが確認され，墓域と考えられている[16]。

近世初期，江戸崎城の城主は，佐竹義宣の弟の芦名盛重であった。1602(慶長7)年，佐竹氏が秋田に国替えとなり，青山忠俊が江戸崎城の城主となるが，まもなく廃城となる。当遊跡周辺には，近世の塚の赤羽根塚<72>，沼田庚申塚<73>，古橋塚<74>がある。

※　文中の<>内の番号は，第1図及び表1の該当番号と同じである。

註
1）茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会　2001年3月
2）本橋弘巳「中峰遊跡　発掘遊跡　一般国道468号線首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第286集　2008年3月
3）註2文献と同じ
4）茨城県史編さん原始古代史専門委員会『茨城県史料　考古資料編－先土器・縄文時代－』茨城県　1979年3月
5）註2文献と同じ
6）関宮正光・高野浩之・平岡和夫『楯の台古墳群　第2・3次発掘調査報告書』江戸崎町教育委員会　2001年3月
7）鈴木美治「一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遊跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第65集　1991年3月
8）註7文献と同じ
9）註6文献と同じ
10）関宮正光『姫宮古墳群第1・2号墳　水神峯古墳』江戸崎町教育委員会　2000年10月
11）註10文献と同じ
12）註2文献と同じ
13）註7文献と同じ
14）中山信名著・栗田寛補『宮崎報恩会版　新編常陸国誌』嵩書房　1979年12月
15）大関武「二重堀遺跡　主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第297集　2008年3月
16）註2文献と同じ

参考文献
江戸崎町史編さん委員会『江戸崎町史』江戸崎町　1997年3月

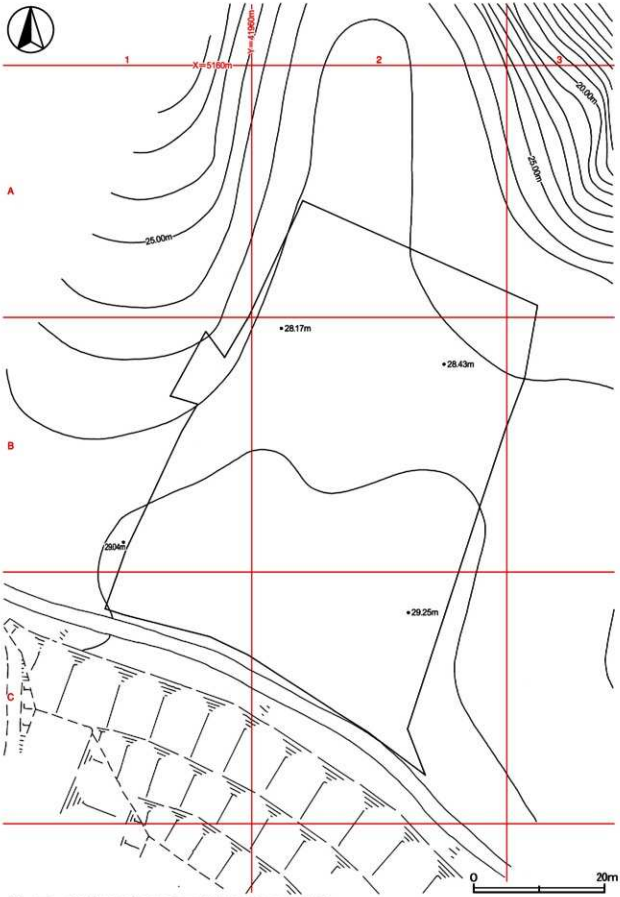


第１図　東前遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院１：25,000「江戸崎」）

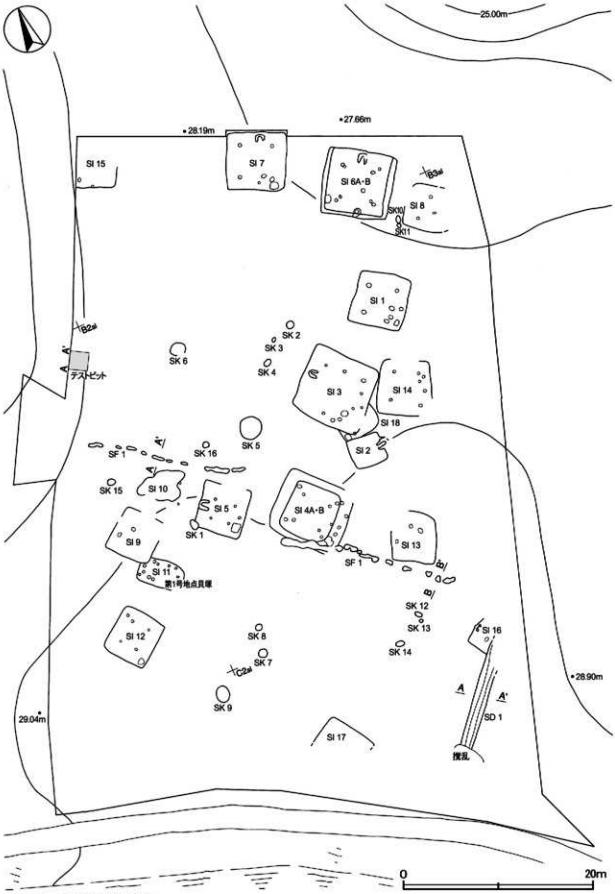
表１　東前遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	東前遺跡		○	○	○	○		
2	中峰遺跡	○	○		○		○	
3	児松遺跡		○					
4	沼田貝塚		○					
5	狸崎遺跡		○		○			
6	村田貝塚		○		○		○	
7	原南遺跡		○					
8	神田道貝塚		○					
9	塙遺跡		○				○	
10	寺山遺跡		○					
11	センゲン貝塚		○					
12	台畑貝塚		○		○			
13	吹上貝塚		○	○				
14	明神貝塚		○					
15	駒塚貝塚		○		○	○		
16	中道遺跡		○		○	○	○	
17	赤羽根遺跡		○		○			
18	立通し遺跡		○	○				
19	土戸古墳		○		○	○		
20	池台遺跡		○			○	○	
21	桜塚遺跡		○			○		
22	羽賀栗山遺跡		○					
23	豆薬師遺跡		○		○		○	
24	堂ノ上遺跡		○		○			
25	駒塚台上遺跡		○		○	○		
26	駒塚荒久遺跡		○		○			
27	佐倉原古墳群		○		○	○		
28	新山遺跡		○					
29	八幡台遺跡		○					
30	大門遺跡		○		○			
31	荒野遺跡		○		○			
32	芝ヶ谷遺跡		○		○			
33	塚本遺跡			○	○	○		
34	東前古墳群				○			
35	亀台古墳群				○			
36	見晴塚古墳				○			
37	山後古墳				○			

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
38	大日古墳				○			
39	亀ヶ谷城古墳				○			
40	荒地平古墳				○			
41	荒地古墳				○			
42	中城古墳				○			
43	木納場古墳群	○			○			
44	大塚古墳				○			
45	大塚山古墳				○			○
46	外浦古墳				○			
47	新山西遺跡				○	○	○	
48	犬塚遺跡						○	○
49	浅間山古墳群				○			
50	大夫屋敷遺跡				○	○		
51	辺田後遺跡				○	○		
52	自穢前遺跡				○	○	○	
53	原久保遺跡				○			
54	宮後遺跡				○			
55	時崎平遺跡				○			
56	神明平遺跡				○			
57	狸崎北遺跡				○			
58	原屋敷遺跡				○	○		
59	原山遺跡				○			
60	原迎遺跡				○			
61	佐倉原遺跡				○	○		
62	佐倉原南遺跡				○			
63	観音前遺跡					○	○	
64	香取台遺跡					○	○	
65	二の宮貝塚				○	○	○	○
66	栗山遺跡		○		○			
67	江戸崎城跡						○	○
68	沼田遺跡						○	
69	二重堀遺跡		○				○	
70	御城遺跡						○	
71	羽賀城跡						○	
72	赤羽根塚							○
73	沼田庚申塚							○
74	古橋塚							○



第２図　東前遺跡調査区設定図（遺跡測量図から作成）


25.00m
27.66m
28.19m
SI 15
SI 7
SI 6A・B
SK10
SI 8
SK11
SI 1
SK 2
SK 3
SK 6
SK 4
テストピット
SI 3
SI 14
SI 18
SI 2
SK 16
SK 5
SF 1
SK 15
SI 10
SI 5
SI 4A・B
SK 1
SI 9
SI 13
SF 1
SI 11
第1号地点貝塚
SK 12
SK 13
SI 16
SI 12
SK 8
SK 14
SK 7
28.90m
A
A'
SD 1
29.04m
SK 9
SI 17
攪乱
0
20m

第 3 図　東前遺跡全体図

第3章　調　査　の　成　果

第1節　調査の概要

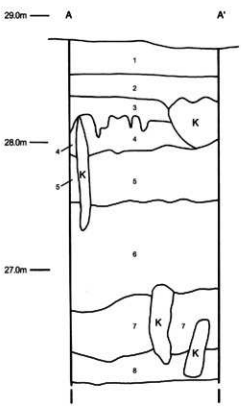
東前遺跡は，沼里川と花指川に挟まれた標高28～29mの台地縁辺部に立地している。調査面積は3,340㎡で，調査前の現況は山林である。

調査によって，縄文時代，古墳時代を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は，竪穴住居跡20軒(縄文時代1，古墳時代18，平安時代1)，地点貝塚1か所(縄文時代)，道路跡1条(時期不明)，溝跡1条(時期不明)，土坑16基(古墳時代1，時期不明15)である。

遺物は，遺物コンテナ(60×40×20cm)に20箱出土している。主な遺物は，縄文土器(深鉢)，土師器(坏・椀・鉢・坩・器台・炉器台・高坏・壺・甕・甑・ミニチュア土器・不明)，須恵器(蓋・壺・甕・瓶類・甕・不明)，土製品(土玉・支脚)，石器(磨製石斧・敲石・砥石)，石製品(紡錘車)，貝(マガキ・ハマグリ・カガミガイ・ウネナントマヤガイ・アカニシ・ウミニナ・アサリ ィ・マシジミ)などである。

第2節　基　本　層　序

B 1 a0区にテストピットを設定し，基本土層(第4図)の堆積状況の観察を行った。土層の観察結果は，以下の通りである。



第4図　基本土層図

第1層は黒褐色を呈する表土層で，粘性・締まりともに普通で，層厚は35cmである。

第2層は暗褐色を呈する土層で，粘性・締まりともに普通で，層厚は17cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層で，粘性・締まりともに強く，層厚は14～30cmである。

第4層は明褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりともに強く，層厚は14～30cmである。

第5層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりともに強く，層厚は36～49cmである。

第6層は暗褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりともに強く，層厚は69～86cmである。第Ⅱ黒色帯に相当する。

第7層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりともに強く，層厚は32～49cmである。

第8層は灰褐色を呈する常総粘土層で，粘性・締りともに強く，層厚は16～26cmである。

なお，遺構は第3層上面で確認されている。

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒，地点貝塚1か所が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

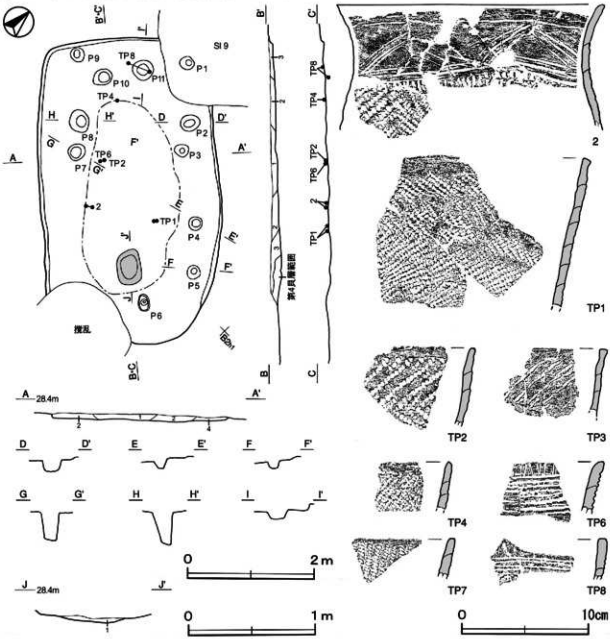
第11号住居跡（第5図）

位置　調査区中央部のB 1a0区，標高29mの台地平坦部に位置しており，住居内に第1号地点貝塚がある。

重複関係　第9号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.80m，短軸2.85mの長方形で，主軸方向はN－47°－Wである。壁高は4～8cmで，立ち上がりは不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，柱穴の内側に硬化面が認められる。



第5図　第11号住居跡・出土遺物実測図

炉　中央部やや南西壁寄りに付設されている。長径0.54m，短径0.38mの楕円形で，床面から８～10cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量

ピット　11か所。Ｐ１～Ｐ11は深さ13～54cmで，Ｐ７・Ｐ８が深さ48cm・54cmで深い。壁に沿った柱穴である。

覆土　４層に分層できる。床面に５か所の貝層が形成された後，周囲から土砂が流入した自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片231点（深鉢）が出土している。土器片は散在しており，２は第３貝層に覆われた範囲の床面から出土した破片が接合したものである。TP１・TP２・TP４・TP６は床面から出土している。TP８は床面とＰ11の覆土上層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から前期中葉である。

第11号住居跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	〔20.4〕	(9.9)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部を沈線で区画し区画内に山形文　胴部単節縄文LRと孔の羽状縄文　内面丁寧な調整	床面	10%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
TP１	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	単節縄文LRと孔の羽状縄文　外面一部横ナデ内面丁寧な調整	床面	
TP２	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	不良	附加縄文　外面一部横ナデ　内面丁寧な調整	床面	
TP３	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	不良	無節縄文L　外面一部横ナデ　輪積み痕が明瞭　内面丁寧な調整	覆土中	
TP４	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	不良	単節縄文LR　外面一部横ナデ　内面丁寧な調整	床面	
TP６	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部直下に条線施文後半截竹管による横沈線　内面丁寧な調整	床面	
TP７	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	不良	単節縄文LR　外面一部横ナデ　内面丁寧な調整	覆土中	
TP８	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	不良	小突起　口縁部半截竹管による横沈線　胴部縄文施文　内面丁寧な調整	床面・P11上層	

（2）地点貝塚

第１号地点貝塚（第６図）

位置　調査区中央部のＢ１g0区，標高29mの台地平坦部に位置している第11号住居跡内にある。

確認状況　第11号住居跡内に５か所の貝層範囲が，確認面で確認された。貝層は，住居の北半部に１か所，南半部に４か所ある。

貝層範囲の規模　最大長で，第１貝層の範囲は東西長0.28m，南北長0.30m，第２貝層の範囲は東西長0.28m，南北長0.32m，第３貝層の範囲は東西長0.68m，南北長0.86m，第４貝層の範囲は東西長0.66mだけ，南北長0.89m，第５貝層の範囲は東西長0.90m，南北長0.93mである。

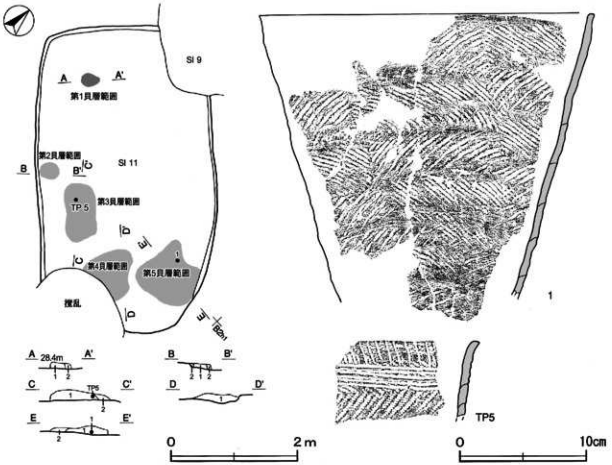
貝層　２層に分層できる。第１層は純貝層で床面に形成されており，その後住居の覆土が堆積している。純貝層の厚さは第１貝層が厚さ10cm，第２貝層が７cm，第３貝層が18cm，第４貝層が14cm，第５貝層が13cmである。第２層は混貝土層で暗褐色土に貝の細片や貝粉が含まれており，土砂の堆積過程で土中に混じったものと考えられる。

土層解説
1　純　貝　層　貝多量
2　暗　褐　色　貝片・貝粉少量，焼土粒子・炭化粒子微量

貝種　純貝層から出土した貝は，第１貝層(マガキ，ハマグリ，カガミガイ，ウミニナ，アサリヵ)，第２貝層(マガキ，ハマグリ)，第３貝層(マガキ，ハマグリ，カガミガイ，アカニシ，ウミニナ，マシジミ)，第４貝層(マガキ，ハマグリ，カガミガイ，ウネナントマヤガイ，アカニシ，ウミニナ，アサリヵ，マシジミ)，第５貝層(マガキ，ハマグリ，カガミガイ，アカニシ，ウミニナ，アサリヵ)で，各貝層とも純水種が主体であり，淡水種のマシジミがごく少量認められる。

遺物出土状況　貝層内から縄文土器片17点(第１貝層範囲８点，第２貝層範囲５点，第３貝層範囲３点，第５貝層範囲１点)が出土している。１は第５貝層範囲の純貝層，TP５は第３貝層範囲内の純貝層からそれぞれ出土している。

所見　各貝層範囲の純貝層内から出土している土器は，住居の床面から出土している土器と同じ前期中葉である。貝の廃棄は，住居廃絶時もしくは廃絶後まもない時期と考えられ，５か所の貝層は，住居の廃絶時期と同じ前期中葉に形成されたものと考えられる。



第６図　第１号地点貝塚・出土遺物実測図

第１号地点貝塚出土遺物観察表（第６図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[26.4]	(22.6)	－	長石・石英	褐	不良	無節縄文と撚の甚だ縄文　外面一部後ナデ　輪積み痕が明瞭　内面丁寧な調整	第３貝層範囲純貝層内	20%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP５	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	不良	口縁部直下に条痕，胴部単節縄文L施文後半截竹管による横沈線　内面丁寧な調整	第３貝層範囲純貝層内	

表２　第１号地点貝塚出土貝種一覧表

	マガキ			ハマグリ			カガミガイ			ウネナントマモガイ			アカニシ			ウミニナ			アサリ ョ			マシジミ		
貝層範囲	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)	殻頂数	大きさ(cm)	重量(kg)
1	－	－	0.28	16	2.2～3.8	0.004	1	－	0.005	－	－	0.005	－	－	－	2	－	0.03	2	2.5・2.7	0.005	－	－	－
2	－	－	0.08	34	2.5～3.4	0.09	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
3	－	－	9.3	505	2.1～5.4	1.7	30	4.0～5.1	0.37	－	－	0.37	13	2.3～5.1	0.032	18	2.1～2.7	0.012	－	－	－	2	1.8～2.3	0.002
4	－	－	16.3	1511	1.6～4.3	3.3	15	2.3～4.3	36.0	3	0.9～1.9	36.0	13	3.0～6.8	0.1	57	1.7～3.0	0.027	3	1.9～3.4	0.043	8	1.2～2.4	0.008
5	－	－	2.1	1458	1.8～3.6	4.0	196	4.2～5.4	2.0	－	－	2.0	1	4.2	0.04	41	2.0～3.1	0.04	9	0.9～4.2	0.02	－	－	－

※殻頂数は殻頂部の残っているもののみ記載し，重量はそれ以外の貝殻も含めた数字である。
※大きさは殻頂部まで完全に残っているものを計測し，その最小値と最大値の数字である。

2　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡18軒，土坑１基が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第７・８図）

位置　調査区中央部のＢ２c8区，標高28ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.90ｍ，短軸5.58ｍの方形で，主軸方向はＮ－55°－Ｗである。壁高は43～60㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，壁際及びコーナー部を除いて硬化面が認められる。

炉　中央部やや北西壁寄りに付設されている。長径0.90ｍ，短径0.58ｍの楕円形で，床面から４～７㎝くぼんだ凹凸な底面を炉床とした地床炉である。炉床は焼土粒子，炭化粒子が確認されただけで，赤変硬化はしていない。

炉土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　７か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ28～47㎝でＰ２が深く，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５・Ｐ６は深さ20㎝・40㎝で，炉と向かい合う南東壁の中央部に対になって位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ７は深さ19㎝で，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー部に位置している。長軸0.58ｍ，短軸0.38ｍの長方形で，深さは50㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量

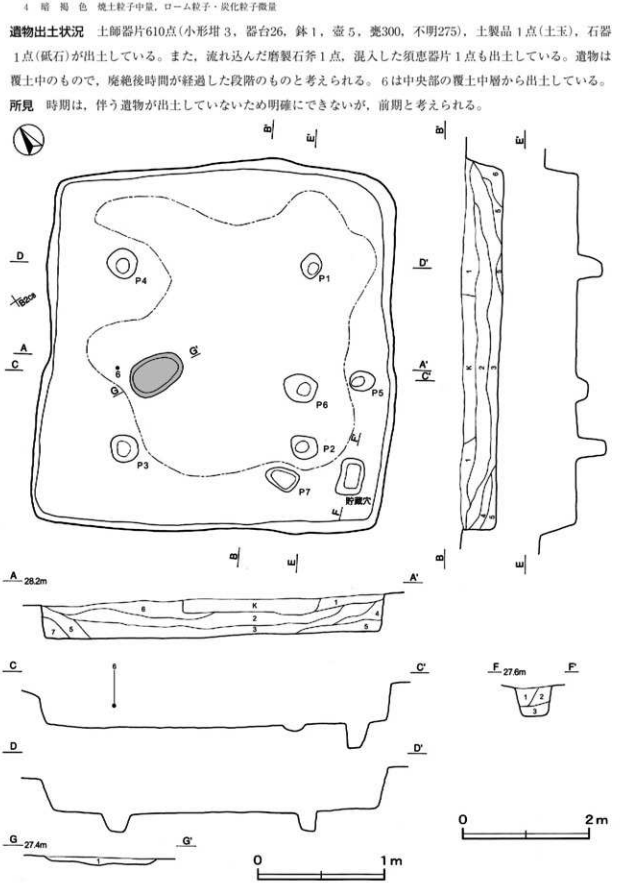
覆土　７層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。焼土塊が壁際と中央部の覆土中から確認されている。

土層解説

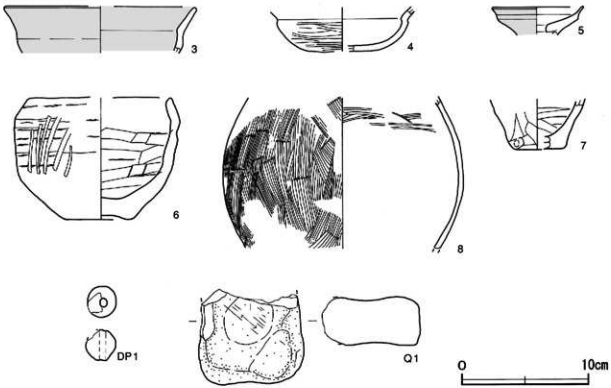
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子中量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片610点(小形坩３，器台26，鉢１，壺５，甕300，不明275)，土製品１点(土玉)，石器１点(砥石)が出土している。また，流れ込んだ磨製石斧１点，混入した須恵器片１点も出土している。遺物は覆土中のもので，廃絶後時間が経過した段階のものと考えられる。６は中央部の覆土中層から出土している。

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため明確にできないが，前期と考えられる。



第７図　第１号住居跡実測図



第８図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表（第８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師器	小形壺	[15.0]	(3.7)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ	覆土中	5％
4	土師器	小形壺	－	(3.6)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ磨き　内面剥落　二次焼成	覆土中	5％
5	土師器	器台	7.1	(2.2)	－	長石・石英	橙	普通	受部外・内面横ナデ	覆土中	20％
6	土師器	鉢	[11.2]	9.6	5.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ヘラナデ・ナデ　輪積み痕が明瞭　二次焼成	中層	90％ PL.9
7	土師器	小形壺	－	(4.0)	[4.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	5％
8	土師器	甕	－	(11.8)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ハケ目　内面ハケ目後ナデ	覆土中	10％

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP1	土玉	2.4	2.5	0.6	(13.7)	長石・石英	ナデ	覆土中	PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(7.5)	8.3	3.8	(363.2)	砂岩	砥面１面	覆土中	

第３号住居跡（第９・10図）

位置　調査区中央部のＢ２e6区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第18号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸7.54m，短軸7.32mの方形で，主軸方向はＮ－45°－Ｗである。壁高は８～24cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側に硬化面が認められる。

竈　北西壁中央部の壁から44cm内側に付設されている。床面に貼り付けられている高さ６～９cmの馬蹄形の粘土の高まりが確認された。規模は焚口部から燃焼部奥壁まで88cm，燃焼部幅32cmである。火床部は床面と同じ高さで，火床面は赤変硬化している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子・粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子・粘土粒子多量，ローム粒子微量
4　灰　白　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　灰　白　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉　２か所。炉１は中央部やや南西壁寄りに付設されている。長径0.75m，短径0.57mの楕円形で，床面から２cmくほんだ底面を炉床とした地床炉である。炉２は中央部に付設されている。撹乱を受けており，長径0.65m，短径0.52mの楕円形で，床面から６cmくほんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は２か所とも赤変硬化している。炉の覆土に硬化した層が認められないことから，竈とともに２か所とも併用されていたものと考えられる。

炉１土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ロームブロック微量

炉２土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

ピット　８か所。Ｐ１～Ｐ５は深さ11～40cmでＰ２が浅いが，規模と位置から主柱穴である。撹乱のため確認されていないが，主柱穴の数は配置から６か所と推測される。Ｐ６は深さ36cmで，竈と向かい合う南東壁の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ７・Ｐ８は深さ26cm・84cmで，性格は不明である。

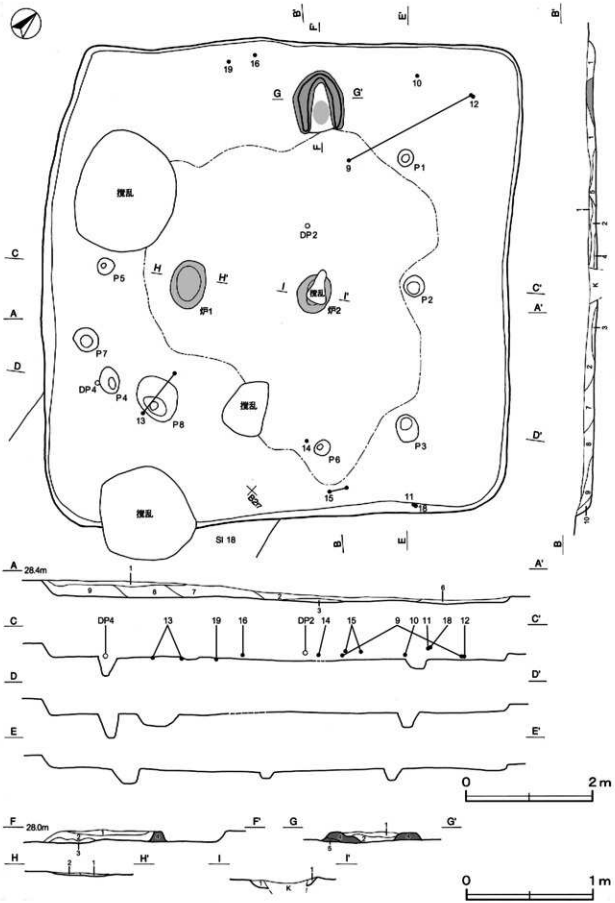
覆土　10層に分層できる。第３・５層はロームブロックや焼土ブロックが多く含まれていることから埋め戻されたもので，第１・２・４，６～10層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

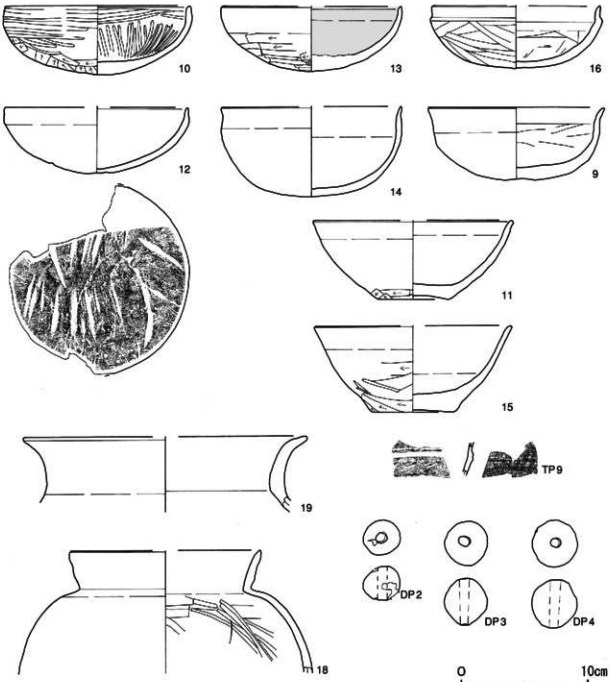
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子中量
10　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片539点（坏22，高坏１，鉢２，甕256，不明258），土製品２点（土玉，支脚），石器１点（砥石）が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片17点，弥生土器片１点，土師器片27点，磨石１点，混入した土師器片２点も出土している。DP４はＰ４付近の床面から出土している。９は竈の前方部と北コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合している。10～12・14～16・18・19は各壁際もしくは壁寄りの床面及び覆土下層からそれぞれ出土しており，廃絶後まもない時期のものと考えられる。DP２は中央部の覆土下層から出土しており，廃絶後時間が経過した段階のものと考えられる。支脚片が竈の火床面から出土している。TP９・DP３は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から５世紀後葉である。竈は壁に接しておらず，構造から初期竈と考えられる。



第9図　第3号住居跡実測図



第10図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師器	坏	13.9	5.8	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ　二次焼成	下層	85% PL.7
10	土師器	坏	14.7	5.4	－	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面ヘラ磨き　体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　二次焼成	下層	75% PL.7
11	土師器	坏	[15.8]	6.2	5.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ　底部周縁ヘラ削り　二次焼成	下層	70% PL.7
12	土師器	坏	[14.4]	5.2	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　底部幅広の線状痕　二次焼成	下層	50% PL.7
13	土師器	坏	[14.2]	5.1	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ　二次焼成	床面	65%
14	土師器	坏	[14.2]	7.1	－	長石・石英	浅黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面横ナデ	下層	40%
15	土師器	坏	[15.6]	6.8	6.6	長石・石英	橙	普通	口縁部外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ・ヘラ磨き　内面横ナデ・ナデ	下層	60%
16	土師器	坏	[13.2]	4.9	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面ヘラナデ・ナデ	下層	45% PL.7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	土師器	甕	〔15.0〕	(9.7)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ナデ　内面ヘラナデ・ナデ	下層	10%
19	土師器	甕	〔22.6〕	(5.9)	－	長石・石英	浅黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	10%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
TP 9	須恵器	甕か	長石	灰	良好	櫛描波状文	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP 2	土玉	2.9	2.6	0.8	(19.3)	長石・石英	ナデ	下層	
DP 3	土玉	3.4	3.6	0.8	39.8	長石・石英	ナデ	覆土中	PL11
DP 4	土玉	3.6	3.8	0.8	47.2	長石・石英	ナデ	床面	PL11

第４Ａ号住居跡（第11～16図）

位置　調査区中央部のＢ２g4区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号道路に掘り込まれている。

規模と形状　長軸7.92m，短軸7.20mの方形で，主軸方向はＮ－43°－Ｗである。壁高は40～70cmで，ほぼ直立している。

床　第４Ｂ号住居跡の床面をそのまま使用している。ほぼ平坦で，壁際及びコーナー部を除いて硬化面が認められる。壁溝が撹乱を受けている箇所以外の壁下で確認されている。各壁際から焼土塊及び炭化範囲が確認されており，壁際では床面と焼土層の間に焼土を含まない層が確認される。また，床面が焼けて赤変している箇所もある。北東・南西壁寄りの床面からは炭化材が確認されている。

焼土焼土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化物少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

炉　北西壁寄りに位置し，第４Ｂ号住居跡の壁溝を掘り込んで付設されている。長径0.46m，短径0.39mの楕円形の地床炉である。炉床は赤変硬化している。

ピット　８か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ60～70cmで，規模と位置から主柱穴であり，第４Ｂ号住居跡の主柱穴から放射状に外側に移動されている。Ｐ５・Ｐ６は深さ42cm・64cmで，炉と向かい合う南東壁の中央部に対になって位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ５は第４Ｂ号住居跡のＰ５から壁寄りに移動されている。Ｐ７・Ｐ８は深さ45cm・28cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー部に２か所位置している。貯蔵穴１は長軸0.68mが確認され，短軸0.58mの長方形で，深さ48cmである。貯蔵穴２は一辺0.70mの方形で，深さ26cmが確認されている。貯蔵穴１の底面は平坦で，壁はほぼ直立している。重複しており造り替えが考えられるが，新旧関係は不明である

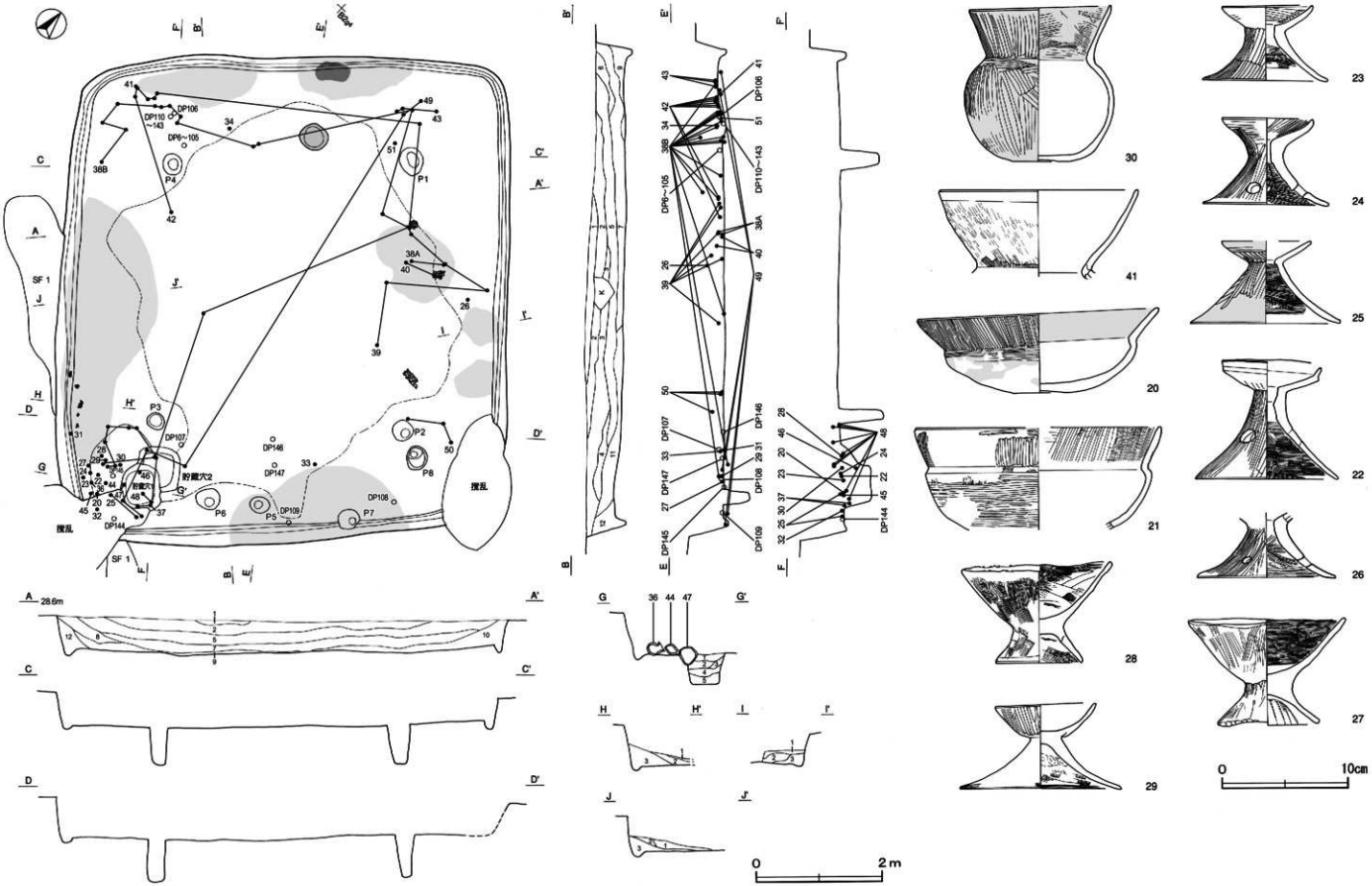
貯蔵穴１土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
2　暗　褐　色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化物少量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　黒　褐　色　炭化物中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量

覆土　12層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況だが埋め戻されたものである。

土層解説

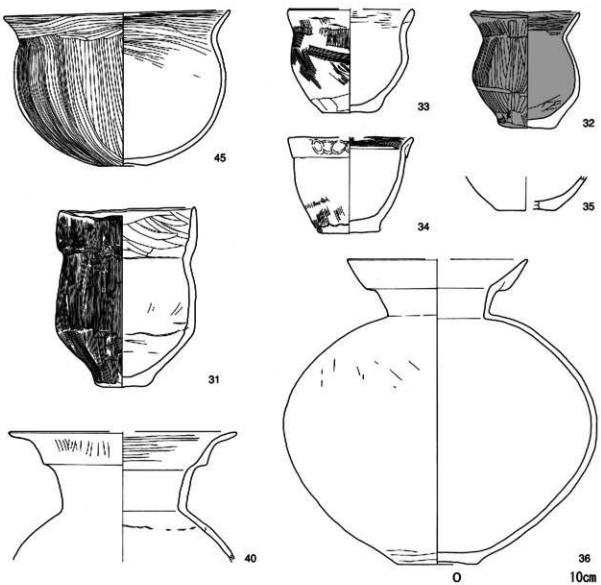
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　黒　　色　炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
9　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
10　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
12　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量



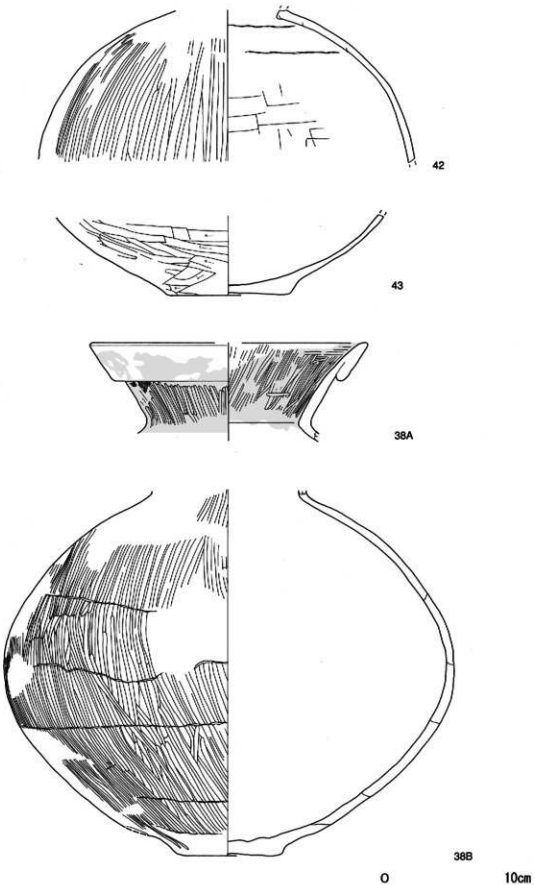
第11図　第４Ａ号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片1600点(器台５，高坏５，小形壺６，壺153，甕62，壺・甕類513，不明856)，ミニチュア土器１点，土製品150点(土玉)，焼成粘土塊片11点，二次焼成の痕跡をもつ礫片１点が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片39点も出土している。遺物が多量に出土しほぼ完形品や大形の破損品も多く，貯蔵穴周辺に集中している。土玉はＰ４付近，南東壁寄り，貯蔵穴付近の床面にそれぞれ集中している。20・22～24・27～31は貯蔵穴付近，26は北東壁寄り，51はＰ１付近の床面からそれぞれ出土している。36・44・45は貯蔵穴の近くの床面から横位で出土している。37・46・47も床面にあったものが，埋め戻された土砂に押されて貯蔵穴内に落ちたものと考えられる。25・32・DP144は木根による攪乱を受けている範囲の床面から出土しているが，原位置はそれほど変わっていないものと考えられる。33は南東壁寄り，34はＰ４付近の覆土下層からそれぞれ出土している。38Ａは覆土下層，38Ｂ・39は床面から覆土上層にかけて，48・49は貯蔵穴内から覆土下層，49は床面の広範囲にかけて散在した状態でそれぞれ出土した破片が接合したものである。

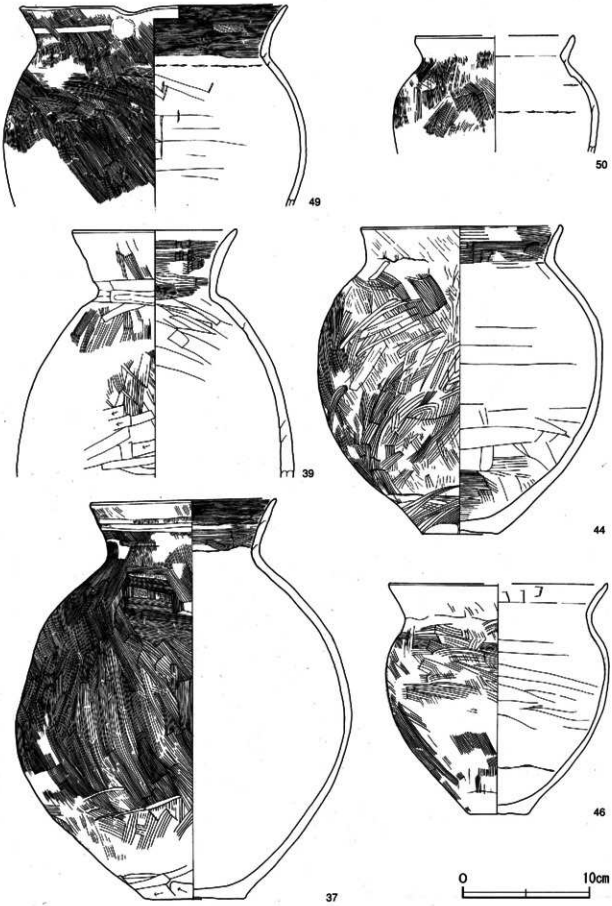
所見　時期は，出土土器から前期前葉である。第４Ｂ号住居跡から主柱穴や出入口施設に伴うピットが外側に移動され，また，炉が第４Ｂ号住居跡の埋め戻された壁溝を掘り込んで構築されていることから，第４Ｂ号住居跡から柱を据え替え壁を四方に拡張したもので，面積は30㎡ほど広がっている。また，床面が焼けていることや炭化材が出土していることから，焼失住居と考えられる。



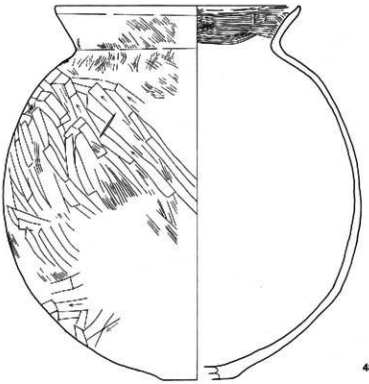
第12図　第４Ａ号住居跡・出土遺物実測図(1)

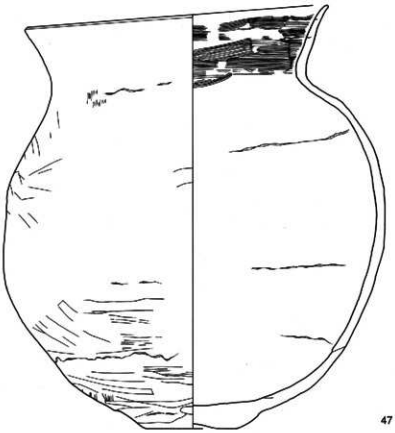


第13図　第４Ａ号住居跡出土遺物実測図(2)



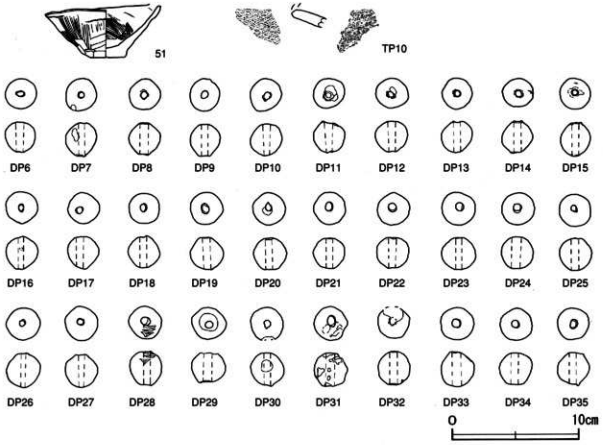
第14図　第４Ａ号住居跡出土遺物実測図(3)





0　　10cm

第15図　第４Ａ号住居跡出土遺物実測図(4)



第16図　第４Ａ号住居跡出土遺物実測図(5)

第４Ａ号住居跡出土遺物観察表（第11～16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師器	坩	18.9	6.7	5.0	長石・石英・赤色粒子	明褐色	普通	口縁部外面ヘラ磨き　内面ナデ　体部外面ヘラ磨き　内面剥落　二次焼成	床面	95% PL.9
21	土師器	坩	[19.2]	(8.2)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後ヘラ磨き　体部外面ヘラ磨き　内面剥落　二次焼成	覆土中	30%
22	土師器	器台	7.8	9.6	11.4	長石・石英	橙	普通	受部外・内面横ナデ・ナデ　脚部外面ヘラ磨き　内面ハケ目　二次焼成	床面	95% PL.8
23	土師器	器台	7.1	6.1	9.8	長石・石英	橙	普通	受部外面ナデ　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ磨き　内面ハケ目・ナデ　二次焼成	床面	95%
24	土師器	器台	7.1	6.9	9.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	受部外・内面ヘラ磨き　脚部内面ハケ目　二次焼成　外面ヘラ磨き	床面	95%
25	土師器	器台	[7.0]	6.7	11.8	長石・石英	明赤褐	普通	受部外面ヘラ磨き　内面剥落　脚部外面ヘラ磨き　内面ハケ目後ナデ　二次焼成	床面ヵ	85%
26	土師器	器台	－	(5.1)	11.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ヘラ磨き　内面ハケ目後ナデ	床面	50%
27	土師器	高坏	12.4	8.6	7.8	長石・石英	橙	普通	外面ハケ目後ナデ　底部部手ナデ　坏部内面ハケ目　脚部内面ヘラナデ	床面	100% PL.8
28	土師器	高坏	11.7	8.1	6.8	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	外面ハケ目・横ナデ　内面ハケ目後ヘラナデ・ナデ　二次焼成	床面	100% PL.8
29	土師器	高坏	7.8	6.9	12.6	長石・石英	黄橙	普通	坏部外面ヘラ磨き　内面ナデ　脚部外・内面ハケ目後ナデ　内面ハケ目・ナデ・指頭押圧	床面	90% PL.8
30	土師器	坩	11.1	12.5	4.0	長石・石英	－	普通	外面ヘラ磨き　口縁部内面ハケ目・ナデ　内面剥落　二次焼成	床面	95% PL.9
31	土師器	小形壺	10.6	14.1	3.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目　口縁部～体部内面ヘラナデ・ナデ　輪積み痕が明瞭	床面	100% PL.8
32	土師器	小形壺	8.6	9.2	4.2	長石・石英	－	普通	外面ヘラ磨き　口縁部内面ヘラ磨き　体部内面ヘラナデ・ナデ	床面ヵ	100% PL.11
33	土師器	小形壺	[9.6]	8.2	4.1	長石・石英	橙	普通	外面ハケ目後ナデ　下端横ナデ　輪積み痕が明瞭　二次焼成	下層	45%
34	土師器	小形壺	[9.8]	7.5	4.8	長石・石英	橙	普通	口縁部の折り返し部に指頭押圧　体部外面ハケ目後ナデ　内面ナデ　二次焼成	下層	55%
35	土師器	小形壺	－	(2.7)	[4.8]	長石・石英	浅黄橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	10%
36	土師器	壺	[14.2]	24.0	6.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部～胴部外面剥落　体部外面下半ナデ　内面ナデ	床面	90% PL.10
37	土師器	甕	14.4	31.5	8.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目後撫ナデ　内面ハケ目　輪積み痕が明瞭　体部外面ハケ目下半ハケ目後ナデ　底部隅縁ヘラ削り　内面ナデ	貯蔵穴上層	70% PL.10
38A	土師器	壺	[21.6]	(7.7)	－	長石・石英・赤色粒子	－	普通	外・内面ヘラ磨き　器面二次焼成により剥落　38Bと同一個体	床面～下層	5％

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴は か	出土位置	備考
38B	土師器	壺	－	(28.8)	8.0	長石・石英・赤色粒子	－	普通	外面ヘラ磨き 輪積み痕が明瞭 二次焼成 内面・底部周縁の器面調落し赤彩不明 38Aと同一個体	床面～上層	60%
39	土師器	甕	12.8	(19.5)	－	長石・石英・黒雲母	橙	普通	口縁部～頸部外・内面ハケ目後横ナデ 体部外面上半ハケ目下半ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ 二次焼成	床面～上層	40%
40	土師器	壺	(17.8)	(10.2)	－	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	器面全面調落 外・内面ヘラ磨き残存 輪積み痕が明瞭	床面～下層	20%
41	土師器	坩	15.6	(7.0)	－	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	外面ハケ目後横ナデ・ナデ 内面ナデ 二次焼成	床面	20%
42	土師器	壺	－	(12.0)	－	長石・石英	黄橙	普通	外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ・ナデ 輪積み痕が明瞭 二次焼成	床面～下層	40%
43	土師器	壺	－	(6.2)	9.5	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ 内面調落 二次焼成	床面	20%
44	土師器	甕	15.7	24.3	6.0	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後横ナデ 外面輪積み痕が明瞭 体部外面ハケ目後ヘラナデ・ナデ 内面ヘラナデ・ナデ 一部ハケ目残存	床面	95%
45	土師器	鉢	17.8	12.4	3.8	長石・石英	明褐	普通	外・内面ヘラ磨き 体部内面調落 二次焼成	床面	95% PL.9
46	土師器	甕	(17.2)	18.1	4.7	長石・石英・赤色粒子	明黄橙	普通	口縁部外面ハケ目後横ナデ 内面横ナデ 体部外面ハケ後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ	貯蔵穴上層	75% PL.10
47	土師器	甕	23.8	33.4	7.4	長石・石英	橙	普通	口縁部内面ハケ目 体部外面ヘラナデ・ナデ 下半ハケ目残存 輪積み痕が明瞭 内面ナデ	貯蔵穴上層	80% PL.10
48	土師器	甕	19.4	29.6	[5.4]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目後横ナデ 内面ハケ目 体部外面ヘラ削り・ハケ目 内面ナデ	貯蔵穴上層・床面～下層	55%
49	土師器	甕	20.9	(16.0)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後外面ナデ・指頭押圧 体部外面ハケ目 内面ナデ 輪積み痕が明瞭	貯蔵穴上層・床面	35%
50	土師器	甕	[12.4]	(9.2)	－	長石・石英	橙	普通	外面ハケ目後口縁部外・内面横ナデ 輪積み痕が明瞭 内面調落 二次焼成	床面～下層	10%
51	ミニチュア土器	－	9.0	4.1	2.6	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外・内面ハケ目後ナデ 輪積み痕が明瞭 二次焼成	床面	100% PL.11

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
TP10	土師器	壺	長石・石英	明黄褐	普通	網目状撚糸文施文 頸部内面の一部に赤彩	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 6	土玉	2.5	2.4	0.7	13.5	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP 7	土玉	2.5	2.5	0.5	(16.2)	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP 8	土玉	2.5	2.5	0.6	15.2	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP 9	土玉	2.6	2.5	0.5	15.2	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP10	土玉	2.5	2.5	0.7	15.3	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP11	土玉	2.5	2.5	0.7	(14.2)	長石・石英	ナデ 片方の孔の周囲が剥離 二次焼成	床面	PL.11
DP12	土玉	2.6	2.4	0.6	(14.4)	長石・石英	ナデ 片方の孔の周囲が剥離	床面	PL.11
DP13	土玉	2.4	2.4	0.5	14.3	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP14	土玉	2.5	2.6	0.5	13.7	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP15	土玉	2.4	2.5	0.5	(14.3)	長石・石英	ナデ 片方の孔の周囲が剥離 二次焼成	床面	PL.11
DP16	土玉	2.5	2.6	0.6	15.2	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP17	土玉	2.5	2.6	0.6	14.3	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP18	土玉	2.5	2.5	0.7	14.9	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP19	土玉	2.7	2.6	0.8	16.1	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP20	土玉	2.6	2.5	0.7	(15.7)	長石・石英	ナデ 片方の孔の周囲が剥離 二次焼成	床面	PL.11
DP21	土玉	2.6	2.4	0.7	(15.4)	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP22	土玉	2.5	2.4	0.6	15.5	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP23	土玉	2.6	2.5	0.7	16.5	長石・石英	ナデ	床面	PL.11
DP24	土玉	2.5	2.4	0.6	15.8	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP25	土玉	2.6	2.5	0.5	16.1	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP26	土玉	2.7	2.7	0.5	17.1	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP27	土玉	2.6	2.6	0.5	16.5	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP28	土玉	2.6	2.7	0.7	(16.4)	長石・石英	ナデ 二次焼成	床面	PL.11
DP29	土玉	2.8	2.4	0.6	(15.4)	長石・石英	ナデ 片方の孔の周囲が剥離 二次焼成	床面	PL.11

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP30	土玉	2.6	2.5	0.6	(16.9)	長石・石英	ナデ　二次焼成	床面	PL11
DP31	土玉	2.7	2.7	0.8	(15.4)	長石・石英	ナデ　二次焼成	床面	PL11
DP32	土玉	2.5	2.6	0.5	(15.7)	長石・石英	ナデ　二次焼成	床面	PL11
DP33	土玉	2.6	2.7	0.6	15.7	長石・石英	ナデ　二次焼成	床面	PL11
DP34	土玉	2.6	2.5	0.6	16.7	長石・石英	ナデ	床面	PL11
DP35	土玉	2.5	2.6	0.7	15.7	長石・石英	ナデ	床面	PL11

番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置
DP36	17.2	床面	DP40	17.3	床面	DP44	16.8	床面	DP48	17.0	床面	DP52	17.6	床面	DP56	18.6	床面
DP37	17.5	床面	DP41	18.4	床面	DP45	17.6	床面	DP49	19.4	床面	DP53	19.4	床面	DP57	17.3	床面
DP38	18.3	床面	DP42	16.1	床面	DP46	19.3	床面	DP50	19.1	床面	DP54	18.3	床面	DP58	20.2	床面
DP39	15.7	床面	DP43	16.4	床面	DP47	17.7	床面	DP51	17.3	床面	DP55	19.0	床面	DP59	18.4	床面
番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置
DP60	19.0	床面	DP64	(19.7)	床面	DP68	21.5	床面	DP72	21.0	床面	DP76	22.0	床面	DP80	21.2	床面
DP61	(17.7)	床面	DP65	19.2	床面	DP69	20.4	床面	DP73	19.0	床面	DP77	21.8	床面	DP81	(21.0)	床面
DP62	17.7	床面	DP66	17.9	床面	DP70	17.7	床面	DP74	20.7	床面	DP78	21.8	床面	DP82	19.2	床面
DP63	18.2	床面	DP67	19.0	床面	DP71	22.0	床面	DP75	20.5	床面	DP79	21.5	床面	DP83	21.0	床面
番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置
DP84	21.1	床面	DP88	21.1	床面	DP92	22.1	床面	DP96	22.2	床面	DP100	24.4	床面	DP104	28.6	床面
DP85	20.7	床面	DP89	22.0	床面	DP93	20.2	床面	DP97	(24.2)	床面	DP101	25.2	床面	DP105	43.7	床面
DP86	21.7	床面	DP90	21.6	床面	DP94	23.7	床面	DP98	24.7	床面	DP102	(28.8)	床面	DP106	16.8	床面
DP87	21.8	床面	DP91	22.4	床面	DP95	24.5	床面	DP99	24.0	床面	DP103	28.6	床面	DP107	(16.0)	床面
番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置
DP108	15.8	床面	DP112	13.6	床面	DP116	14.5	床面	DP120	16.3	床面	DP124	16.0	床面	DP128	15.6	床面
DP109	17.1	床面	DP113	12.7	床面	DP117	15.0	床面	DP121	15.2	床面	DP125	16.0	床面	DP129	15.8	床面
DP110	14.0	床面	DP114	14.0	床面	DP118	14.7	床面	DP122	14.9	床面	DP126	14.3	床面	DP130	17.0	床面
DP111	15.4	床面	DP115	14.0	床面	DP119	14.2	床面	DP123	(14.0)	床面	DP127	17.7	床面	DP131	17.2	床面
番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置	番号	重量	出土位置
DP132	16.7	床面	DP136	18.4	床面	DP140	20.9	床面	DP144	(17.9)	床面ｎ	DP148	(24.0)	貯蔵穴覆土中	DP152	21.5	覆土中
DP133	16.4	床面	DP137	19.0	床面	DP141	21.4	床面	DP145	(14.8)	床面	DP149	18.7	覆土中	DP153	20.3	覆土中
DP134	17.7	床面	DP138	17.7	床面	DP142	22.7	床面	DP146	(15.1)	床面	DP150	18.2	覆土中	DP154	24.5	覆土中
DP135	18.0	床面	DP139	19.7	床面	DP143	22.0	床面	DP147	(13.4)	床面	DP151	20.2	覆土中	DP155	(7.0)	覆土中

※ゴシックの番号は，二次焼成の痕跡が明瞭な土玉。

第４Ｂ号住居跡（第17～18図）

位置　調査区中央部のＢ２g4区，標高29mの台地平坦部に位置している。

確認状況　第４Ａ号住居の床面で確認された。

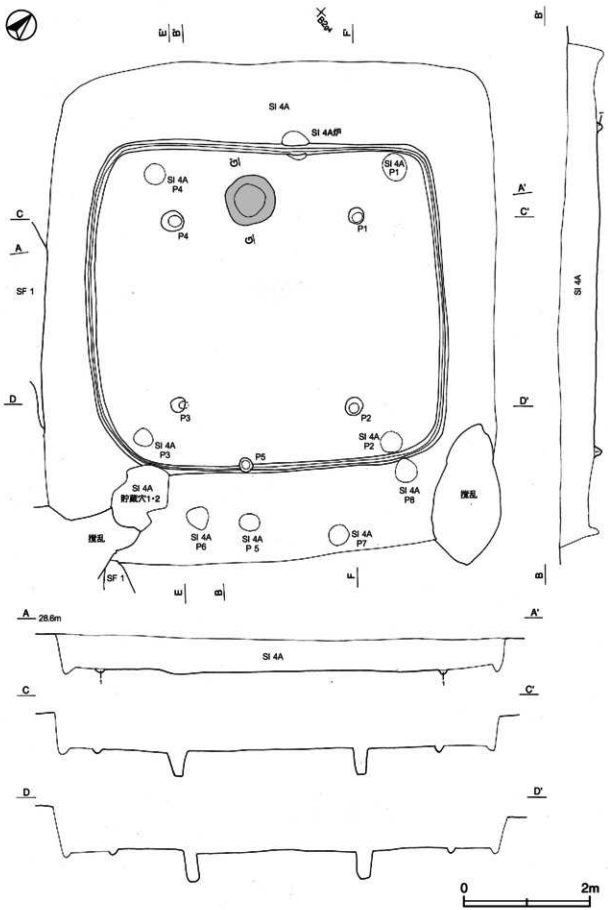
規模と形状　遺存する壁溝周で長軸5.70m，短軸5.25mの方形で，主軸方向はＮ－43°－Ｗである。

床　拡張後もそのまま使用されているため詳細は不明であるが，壁溝が巡る平坦な床と考えられる。

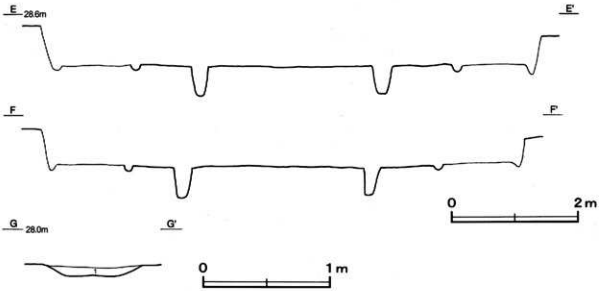
炉　中央部やや北西壁寄りに付設されている。径0.76mの円形で，床面から７～９cmくぼんだ凹凸な底面を炉床とした地床炉である。覆土は硬化しており，炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

1　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量



第17図　第４Ｂ号住居跡実測図(1)



第18図　第４Ｂ号住居跡実測図(2)

ピット　5か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ40～48cmで，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５は深さ23cmで，炉と向かい合う南東壁溝の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。これらの主柱穴や出入り口施設に伴うピットは，第４Ａ号住居跡の内側に位置している。

覆土　壁溝内の埋め戻されたと考えられる硬化した層だけが確認された。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

所見　本住居は，第４Ａ号住居跡の建て替え前の住居である。時期は，本住居から第４Ａ号住居へは時期的に連続していたものと考えられることから前期前葉である。

第５号住居跡（第19・20図）

位置　調査区中央部のＢ２f2区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.30m，短軸4.98mの方形で，主軸方向はＮ－50°－Ｗである。壁高は15～36cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，壁際及びコーナー部を除いて硬化面が認められる。壁溝が攪乱を受けている箇所以外の壁下で確認されている。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cm，燃焼部幅45cmである。袖部は床面と同じ高さに粘土で構築されている。火床部は床面と同じ高さで，火床面は赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは認められない。

竈土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
3　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　粘土粒子多量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　焼土粒子中量
8　灰　白　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

ピット　5か所。P 1～P 4は深さ20～62cmでP 4が深く，規模と位置から主柱穴である。P 5は深さ23cmで，竈と向かい合う南東壁の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー部に位置している。長軸0.90m，短軸0.80mの長方形で，深さは30cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	3	褐	色	ローム粒子中量
2	暗	褐	色	ロームブロック少量	4	褐	色	ロームブロック少量

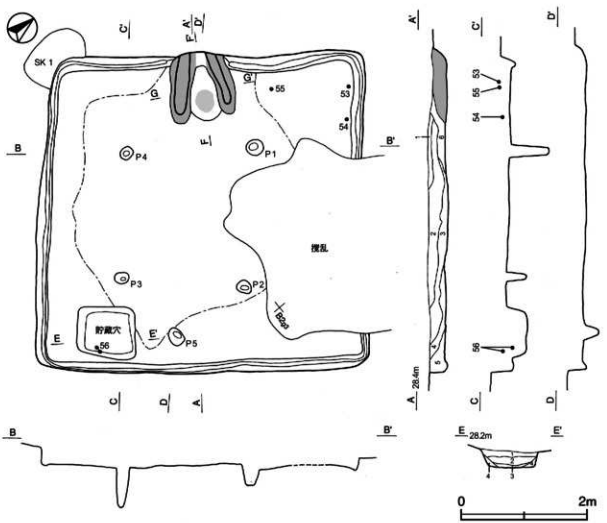
覆土　6層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

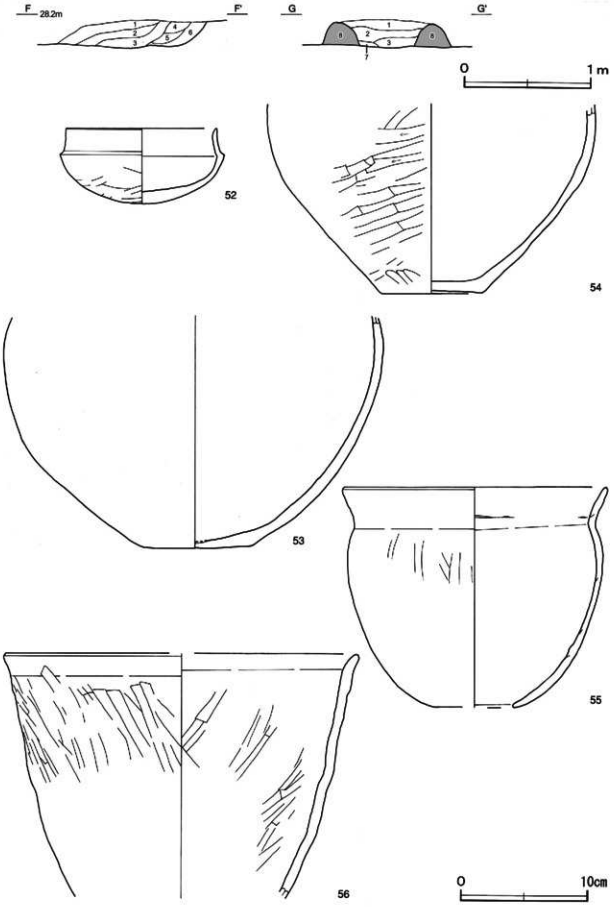
1	極	暗	褐	色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐	色　ローム粒子・炭化粒子微量
2	黒	褐	色　ローム粒子少量，炭化粒子微量		5	褐	色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3	暗	褐	色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量		6	暗	褐	色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片327点(坏８，椀１，甕12，甑140，甕・甑類53，不明113)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片15点，黒曜石片　点も出土している。53～55は壁際の覆土下層から中層にかけてそれぞれ出土しており，貯蔵穴内から出土した56とともに廃絶後まもない時期のものと考えられる。52は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から６世紀前葉である。



第19図　第５号住居跡実測図



第20図　第５号住居跡・出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師器	坏	11.9	6.0	－	長石・石英・赤色粒子・黒雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ナデ　二次焼成　内面剥落	覆土中	95% PL.7
53	土師器	甕	－	(18.4)	9.0	長石・石英・赤色粒子・黒雲母	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ	中層	20%
54	土師器	甕	－	(14.8)	8.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面剥落	中層	10%
55	土師器	甑	20.8	17.4	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　輪積み痕が明瞭　体部外・内面ナデ	下層	45%
56	土師器	甑	[27.8]	(19.2)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面ヘラナデ・ナデ	貯蔵穴上層・下層	10%

第６Ａ号住居跡（第21図）

位置　調査区北部のＡ 2j9区，標高28ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸7.34ｍ，短軸7.04ｍの方形で，主軸方向はＮ－35°－Ｅである。壁高は50～102㎝で，ほぼ直立している。

床　第６Ｂ号住居跡の床面にローム土と暗褐色土を混ぜ込んだ土を２～４㎝ほど薄く貼って構築されている。ほぼ平坦で，壁際及びコーナー部を除いて硬化面が認められる。壁溝が南東・南西・北西壁下に部分的に確認されている。中央部及び南東・南西壁寄りの床面から焼土塊と炭化材が確認されている。

焼土焼土層解説

1　明赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量

竈　北東壁中央部の壁から20㎝内側に付設されており，第６Ｂ号住居跡の竈と位置を変えずに使用されており，修復等が行われたことも推測される。床面に貼り付けられている高さ18～20㎝の馬蹄形の粘土の高まりが確認された。規模は焚口部から燃焼部奥壁まで92㎝，燃焼部幅48㎝である。右袖部は火床部を構築している埋土面に，砂を混ぜ込んだローム土を基部として粘土で構築されている。左袖部は床面に粘土で構築されている。火床部は床面を21㎝皿状に掘り込み，床面と同じ高さまで埋め戻して構築されている。火床面は赤変硬化しており，７㎝ほどの厚さの焼土層が確認された。煙道部は壁外に８㎝掘り込まれており，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
3　灰白色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量
4　明褐色　砂多量
5　赤褐色　焼土ブロック多量
6　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

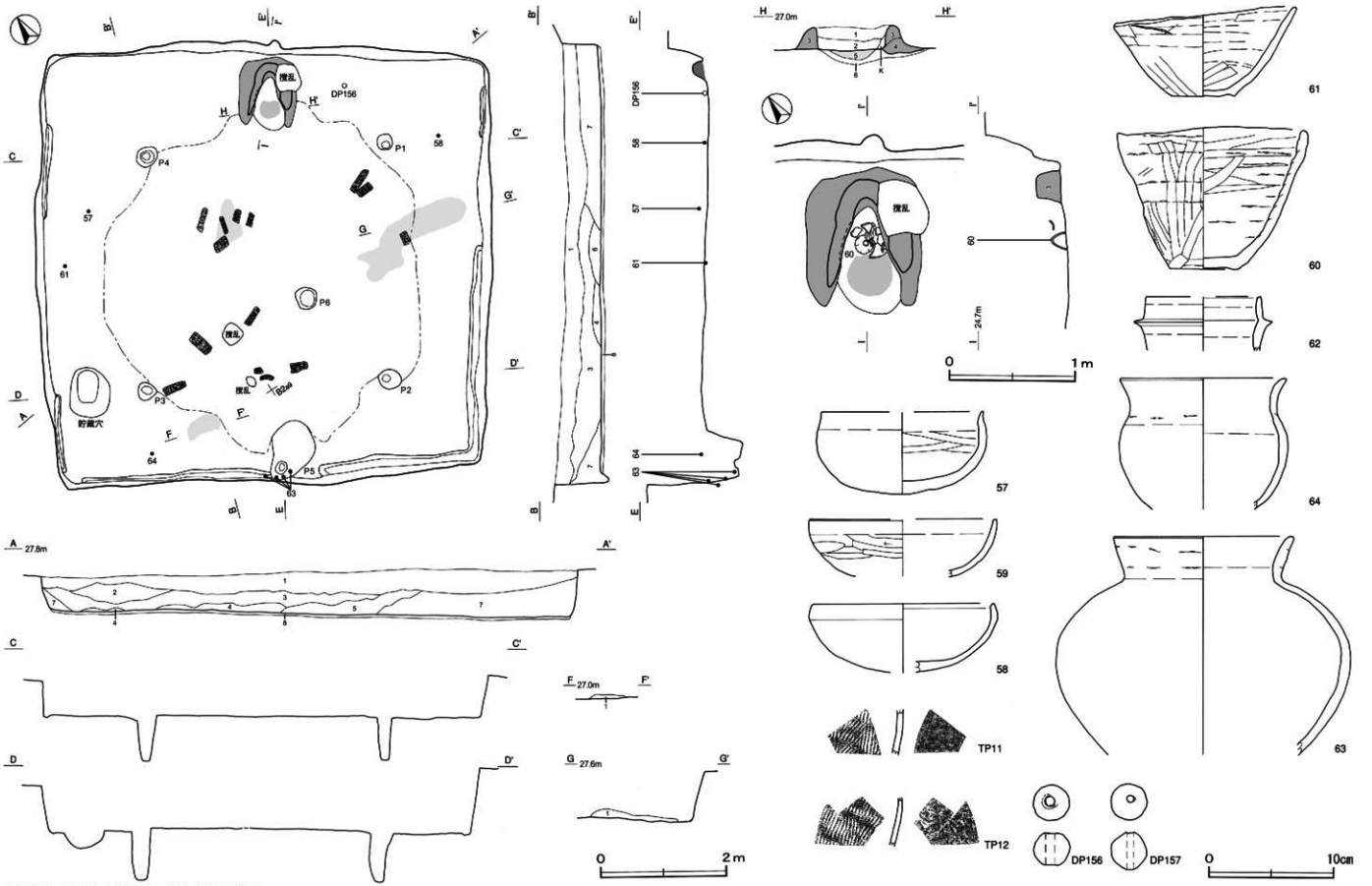
ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ66～82㎝で，規模と位置から主柱穴であり，第６Ｂ住居跡の主柱穴から放射状に外側に移動されている。Ｐ５は深さ58㎝で，竈と向かい合う南西壁の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ５は第６Ｂ号住居跡のＰ５から壁寄りの位置に移動されている。Ｐ６は深さ16㎝で，性格は不明である。

貯蔵穴　西コーナー部に位置している。長径0.80ｍ，短径0.63ｍの楕円形で，深さ26㎝である。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　７層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。第４・６層には焼土ブロックや炭化物が多く含まれている。また，第８層は貼床の構築土である。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　焼土ブロック・炭化物多量，ローム粒子微量
5　褐色　ロームブロック少量
6　褐色　焼土ブロック・炭化物多量
7　暗褐色　ローム粒子少量
8　褐色　ロームブロック多量，炭化粒子少量



第21図　第６Ａ号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片830点（坏43，鉢２，壺１，甕81，甕・甑類135，不明568），須恵器片４点（壺ヵ，甕），土製品２点（土玉），焼成粘土塊６点が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片30点も出土している。60は竈火床面に逆位に伏せられた状態で出土している。58は南東壁寄り，61は北西壁寄り，64は南西壁寄り，DP156は北東壁寄りの床面からそれぞれ出土している。57は北西壁寄りの覆土下層，63はＰ５の覆土下層から上層にかけてそれぞれ出土した破片が接合したものであり，廃絶後まもない時期のものと考えられる。59は竈の覆土中，62・TP11・TP12・DP157は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から５世紀末葉から６世紀初頭である。第６Ｂ号住居跡の床面に貼床を構築し，主柱穴や出入り口施設に伴うピットが外側に移動されていることから，第６Ｂ号住居跡から柱を据え替え壁を南東・南西・北西の三方に拡張したもので，面積は11㎡ほど広がっている。また，床面から焼土塊や炭化材が出土していることから，焼失住居と考えられる。60は二次焼成の痕跡が認められ，支脚に使用されたものと考えられる。

第６Ａ号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
57	土師器	坏	[12.8]	6.9	－	長石・石英・赤色粒子・黒雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ	下層	50% PL 7
58	土師器	坏	14.5	(5.6)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデヵ　器面剥落　二次焼成	床面	60%
59	土師器	坏	[14.9]	(4.6)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面剥落　二次焼成	竈覆土中	10%
60	土師器	鉢	14.7	11.9	5.5	長石・石英	－	普通	外・内面ヘラナデ・ナデ　輪積み痕が明瞭　二次焼成	竈火床面	100% PL 9
61	土師器	鉢	14.4	7.3	5.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ヘラナデ・ナデ　二次焼成	床面	100% PL 7
62	須恵器	壺ヵ	[9.2]	(4.4)	－	長石	灰黄	良好	ロクロナデ	覆土中	5％
63	土師器	甕	14.2	(17.6)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　輪積み痕が明瞭　体部外・内面ナデ	Ｐ５下層～上層	40%
64	土師器	甕	13.2	(10.5)	－	長石・石英・赤色粒子	－	普通	口縁部外・内面横ナデ　輪積み痕が明瞭　体部外・内面ナデ　二次焼成	床面	40%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
TP11	須恵器	甕	長石	灰	良好	平行叩き　内面ナデ	覆土中	
TP12	須恵器	甕	長石	灰	良好	平行叩き　内面ナデ	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP156	土玉	2.9	2.6	0.8	21.6	長石・石英	ナデ	床面	PL12
DP157	土玉	2.9	3.0	0.5	22.4	長石・石英	ナデ	覆土中	PL12

第６Ｂ号住居跡（第22図）

位置　調査区北部のＡ２j9区，標高28mの台地平坦部に位置している。

確認状況　第６Ａ号住居の床面下で確認されている。

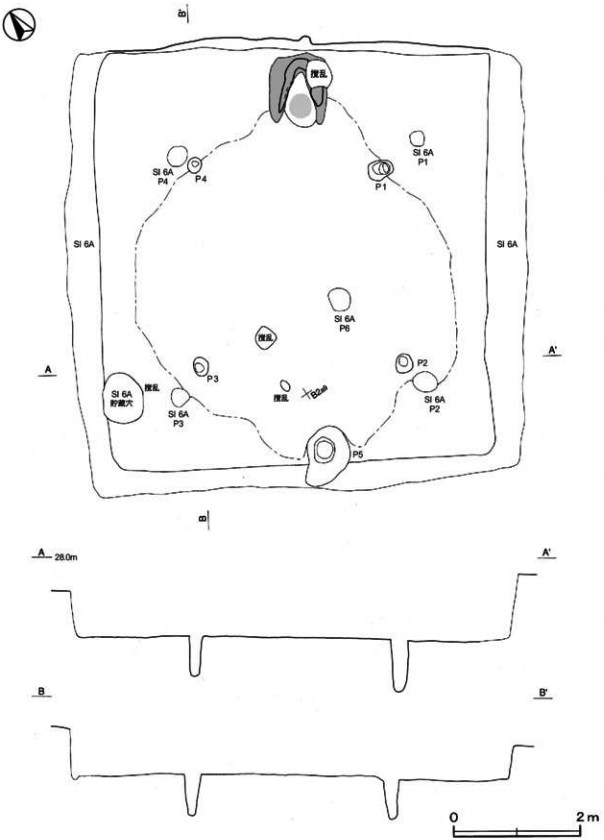
規模と形状　確認された床面で長軸6.52m，短軸6.10mの方形で，主軸方向はＮ－35°－Ｅである。

床　地山をそのまま使用している。ほぼ平坦で，壁際及びコーナー部を除いて硬化面が認められる。

竈　第６Ａ号住居跡の時と，位置や規模及び構造が同じである。

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ62～80cmで，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５は深さ64cmで，竈と向かい合う南西壁の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。これらの主柱穴や出入り口施設に伴うピットは，第６Ａ号住居跡の内側に位置している。

所見　本住居は，第６Ａ号住居跡の建て替え前の住居である。時期は，本住居から第６Ａ号住居へは時期的に連続していたものと考えられることから５世紀末葉から６世紀初頭である。



第22図　第６Ｂ号住居跡実測図

第７号住居跡（第23～25図）

位置　調査区北部のＡ２h7区，標高28ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸6.27ｍ，短軸6.15ｍの方形で，主軸方向はＮ－25°－Ｅである。壁高は40～60㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側から竈の脇にかけて硬化面が認められる。壁溝が北東・南東壁下に巡っており，北西壁下には部分的に確認されている。南西壁及び北西壁寄りの床面から，炭化材が確認されている。

竈　北東壁中央部の壁から28㎝内側に付設されている。床面に貼り付けられている高さ15～23㎝の馬蹄形の粘土の高まりが確認された。規模は焚口部から燃焼部奥壁まで73㎝，燃焼部幅47㎝である。火床部は床面と同じ高さで，火床面は赤変硬化している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
3　暗　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
7　黒　褐　色　ローム粒子少量
8　灰　白　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
9　灰　白　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ93～110㎝で，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５は深さ16㎝で，竈と向かい合う南西壁の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は深さ10㎝で，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー部に位置している。長軸0.88ｍ，短軸0.70ｍの長方形で，深さは37㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

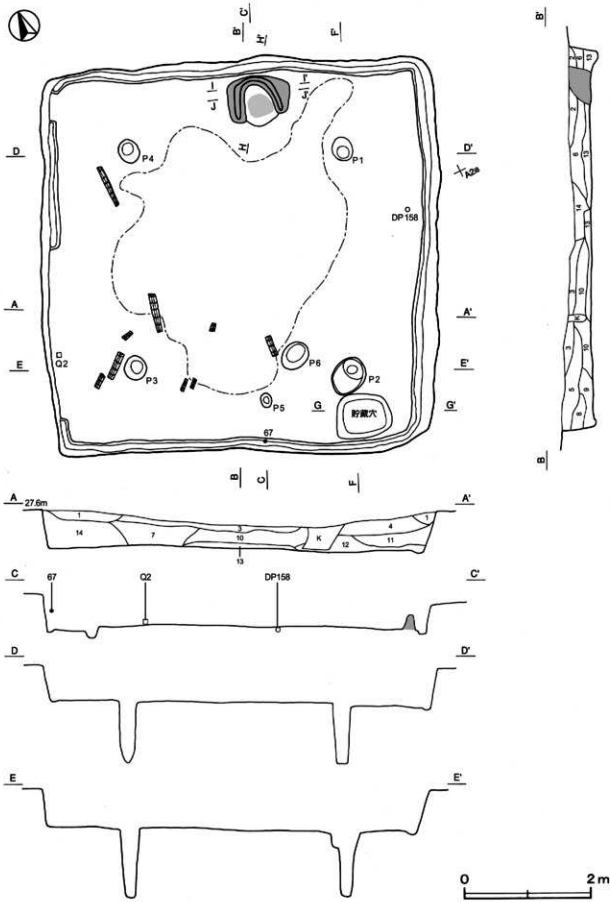
覆土　14層に分層できる。第４層はローム土が主体で，全体的に不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。

土層解説

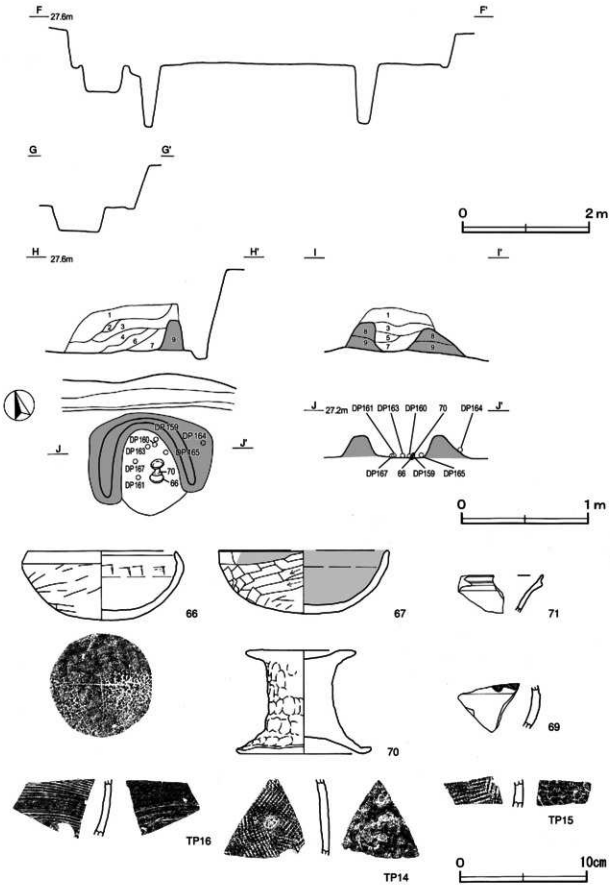
1　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子微量
4　明褐　　色　暗褐土ブロック・炭化粒子微量
5　にぶい褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
6　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
9　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
10　にぶい褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
11　にぶい褐色　ローム粒子中量
12　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
13　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量
14　にぶい褐色　ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片382点(坏16，高坏１，甕21，不明344)，須恵器片５点(蓋１，甕２，甑ヵ１，瓶類１)，土製品11点(土玉)，石製品１点(紡錘車)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片53点，土師器片50点，石皿片１点も出土している。竈の火床部に遺物が集中して出土している。66は竈の火床面に逆位に伏せてあり，その上に70が逆位でのせられた状態で出土している。DP159～DP161・DP163・DP165・DP167は竈の火床部，DP164は竈の右脇の覆土下層，DP162は竈の覆土中からそれぞれ出土している。DP158は南東壁際，Ｑ２は北西壁際の床面からそれぞれ出土している。67は南西壁際の覆土中層から出土しており，廃絶後まもない時期のものと考えられる。69・71・TP14～TP16・DP162・DP166・DP168は覆土中からそれぞれ出土している。

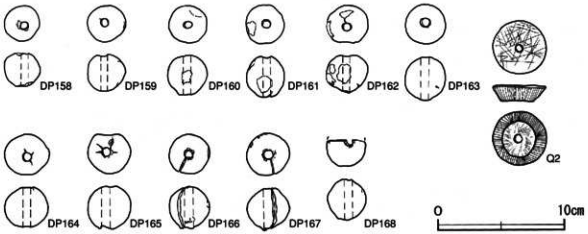
所見　時期は，出土土器から５世紀後葉である。床面から炭化材が出土していることから，焼失住居と考えられる。竈は壁に接しておらず，構造から初期竈と考えられ，竈の火床面から出土しているほぼ完形品の66・70には，二次焼成の痕跡が認められない。



第23図　第７号住居跡実測図



第24図　第７号住居跡・出土遺物実測図



第25図　第７号住居跡出土遺物実測図

第７号住居跡出土遺物観察表（第24・25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手　法　の　特　徴　は　か	出土位置	備考
66	土師器	坏	11.6	5.4	－	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ヘラナデ・ナデ　底部ヘラ記号	竈火床面	100% PL.7
67	土師器	坏	[13.4]	5.0	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後下半ナデ　内面ナデ	中層	45%
69	須恵器	甕ヵ	－	－	－	長石	灰	良好	櫛描波状文	覆土中	85% PL.8
70	土師器	器台	8.7	8.1	10.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面指頭押圧　受部・裾部内面ナデ	竈火床面	
71	須恵器	甕ヵ	－	－	－	長石	灰白	普通	ロクロナデ	覆土中	

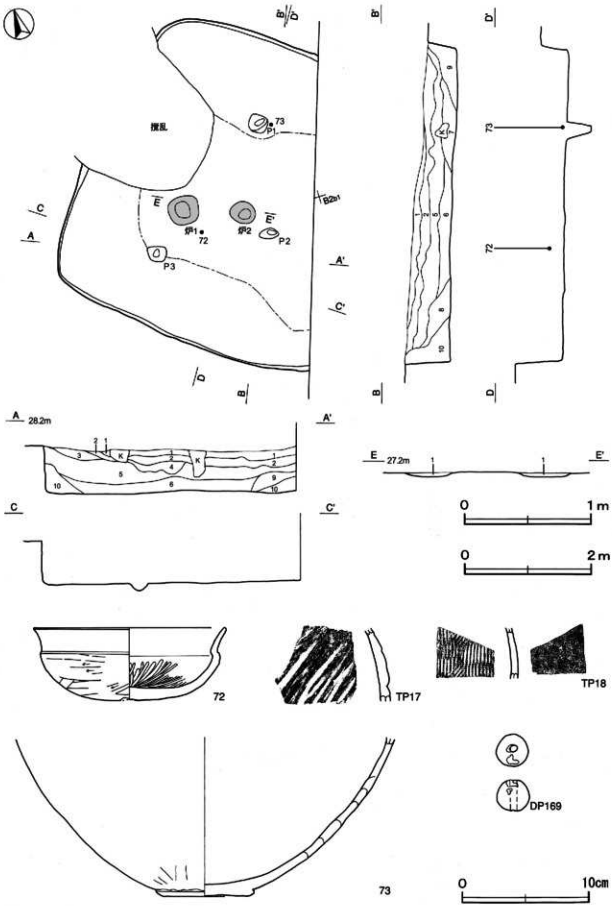
番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
TP14	須恵器	甕	長石	黄灰	良好	擬格子目叩き　内面ナデヵ	覆土中	
TP15	須恵器	甕	長石・石英	灰	良好	擬格子目叩き　内面ナデ	覆土中	
TP16	須恵器	転類	長石	灰	良好	カキ目	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP158	土玉	2.8	2.4	0.6	(19.6)	長石・石英	ナデ	床面	PL.12
DP159	土玉	3.0	2.9	0.5	22.4	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP160	土玉	3.1	3.1	0.6	(26.5)	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP161	土玉	3.1	3.2	0.6	(25.8)	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP162	土玉	3.3	2.9	0.6	(25.9)	長石・石英	ナデ	覆土中	PL.12
DP163	土玉	3.2	3.4	0.7	31.8	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP164	土玉	3.5	3.1	0.6	31.2	長石・石英	ナデ	下層	PL.12
DP165	土玉	3.4	3.3	0.7	34.4	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP166	土玉	3.2	3.3	0.7	28.8	長石・石英	ナデ	覆土中	PL.12
DP167	土玉	3.4	3.3	0.8	29.0	長石・石英	ナデ	竈火床部	PL.12
DP168	土玉	3.1	3.2	0.7	(19.0)	長石・石英	ナデ	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	石　質	特　徴	出土位置	備考
Q 2	紡錘車	4.3	1.2	0.6	32.8	滑石	全面研磨	床面	

第８号住居跡（第26図）

位置　調査区北部のＢ 2a0区，標高28ｍの台地平坦部に位置している。



第26図　第８号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状　南東部が調査区域外に延びているため，確認された部分は北東・南西軸4.98m，北西・南東軸3.86mだけで，形状及び主軸方向は不明である。確認された壁高は43～78cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，Ｐ１・Ｐ３の内側から南側にかけて硬化面が認められる。

炉　２か所。中央部に東西に並んで付設されている。炉１は長径0.47m，短径0.44mの円形，炉２は長径0.41m，短径0.33cmの楕円形で，２か所とも床面から４～６cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。炉の覆土に硬化した層が２か所とも認められないことから，併用されていたものと考えられる。

炉土層解説（炉１・炉２共通）
1　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量

ピット　３か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ11～42cmで，Ｐ３が浅くＰ１が深い。炉を囲むように配置されており，撹乱の位置に１か所存在したと推測すれば，主柱穴と考えられる。

覆土　10層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8　暗　褐　色　ロームブロック微量
9　褐　　色　ローム粒子少量
10　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片117点（坏１，坏・椀類２，甕２，甕・甑類26，不明86），須恵器片１点（甕）が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片４点，土師器片12点も出土している。遺物は覆土中のもので，廃絶後時間が経過した段階のものと考えられる。72は中央部の覆土下層，73はＰ１付近の覆土下層からそれぞれ出土している。TP17・TP18，DP169は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため明確にできないが，５世紀後葉から５世紀末葉と考えられる。

第８号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	土師器	坏	15.2	5.8	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	下層	45% PL.7
73	土師器	甕ｂ	－	(12.5)	6.8	長石・石英・赤色粒子・白雲母	明黄褐	普通	外・内面ナデ	下層	20%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
TP17	土師器	甕ｂ	長石・石英	橙	普通	外面幅広の線状痕	覆土中	
TP18	須恵器	甕	長石	灰	普通	平行叩き　内面ナデ	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP169	土玉	2.6	2.5	0.6	(15.3)	長石・石英	ナデ	覆土中	PL12

第９号住居跡（第27･28図）

位置　調査区中央部のＢ１f0区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.88m，短軸4.82mの方形で，主軸方向はＮ－41°－Ｗである。壁高は６～14cmで，立ち上がりは不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，Ｐ２を挟んで北東側と南西側に硬化面が認められ，南西側が広範囲に広がっている。

炉　中央部やや西コーナー部寄りに付設されている。長径0.40m，短径0.33mの楕円形で，床面から6cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　にぶい褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量

ピット　2か所。P1・P2は深さ8cmで，性格は不明である。

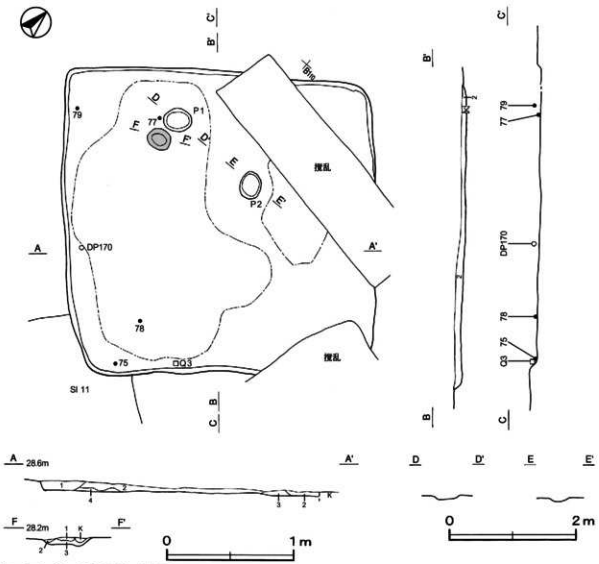
覆土　4層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

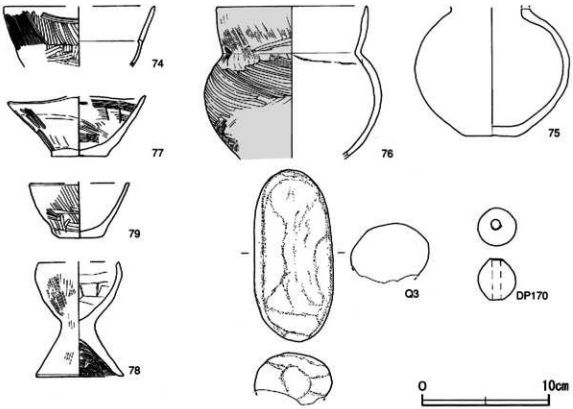
1　褐　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片73点(坩1，壺2，甕53，不明17)，ミニチュア土器3点，土製品1点(土玉)，石器1点(敲石)，二次焼成の痕跡をもつ礫片1点が出土している。75は南コーナー部際，77は炉付近，78は南コーナー部寄りの床面からそれぞれ出土している。79は西コーナー部付近，DP170は南西壁際，Q3は南東壁際の覆土下層からそれぞれ出土しており，廃絶後まもない時期のものと考えられる。74・76は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半である。



第27図　第9号住居跡実測図



第28図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	土師器	小形壺	[11.9]	(4.8)	－	長石・石英・チャート	橙	普通	外面ヘラ磨き　内面調落　二次焼成	覆土中	20%
75	土師器	壺	－	(10.2)	4.0	長石・石英・黒雲母	橙	普通	外・内面ナデ　二次焼成	床面	90% PL10
76	土師器	坩	11.8	(12.0)	－	長石・石英	－	普通	外面ハケ目後ヘラ磨き　内面調落　輪積み痕が明瞭　二次焼成	覆土中	30%
77	ミニチュア土器	－	[10.7]	4.8	4.4	長石・石英	橙	普通	外・内面ハケ目　外面ハケ目後横ナデ・ヘラ磨き　二次焼成	床面	90% PL11
78	ミニチュア土器	－	[6.2]	9.0	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目後ナデ　体部内面ヘラナデ　脚部内面ハケ目	床面	60%
79	ミニチュア土器	－	[7.6]	4.3	3.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ヘラ磨き　内面ナデ　二次焼成	下層	25%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP170	土玉	3.0	3.2	0.8	26.0	長石・石英	ナデ	下層	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備考
Q３	敲石	13.4	6.2	(4.6)	(528.1)	砂岩	両端に敲打痕	下層	

第10号住居跡（第29図）

位置　調査区中央部のＢ２e1区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号道路に掘り込まれている。

規模と形状　床面が部分的に確認されただけであり，規模と形状及び主軸方向は不明である。

床　東西に長く硬化面が認められる。

炉　硬化面の西側に付設されている。長径0.78m，短径は0.52mだけが確認された楕円形で，床面から５～８cm凹凸にくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子微量

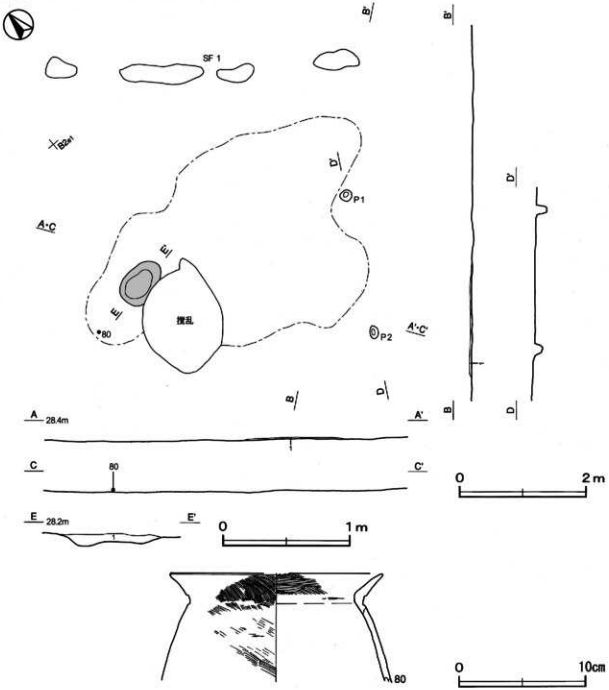
ピット　2か所。Ｐ１は深さ15cmで，炉と正対する南東側に位置していることから，出入り口施設に伴うピットの可能性がある。Ｐ２は深さ13cmで，性格は不明である。

覆土　単一層である。部分的に確認されているだけで堆積状況は不明である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片116点(甕114，不明２)が出土している。80は覆土が遺存していた西側の床面から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期と考えられる。



第29図　第10号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
80	土師器	甕	〔16.8〕	(8.5)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後横ナデ 体部外面ハケ目後ナデ 内面ナデ 輪積み痕が明瞭	下層	10%

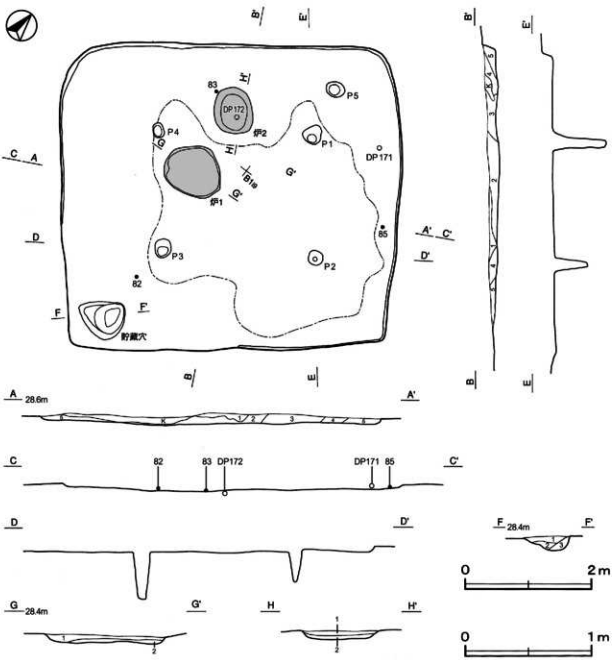
第12号住居跡（第30・31図）

位置 調査区中央部のＢ１i8区，標高29mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.38m，短軸4.84mの長方形で，主軸方向はＮ－37°－Ｗである。壁高は８～18cmで，ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で，柱穴の間から東側に硬化面が広がって認められる。

炉 ２か所。中央部やや西寄りに南北に並んで付設されている。炉１は長径0.95m，短径0.81mの楕円形で，



第30図　第12号住居跡実測図

床面から４～６cm凹凸にくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉２は長径0.74m，短径0.59cmの楕円形で，床面から６cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は２か所とも赤変硬化している。炉２の覆土は硬化しており，炉１へ造り替えられ使用されなくなったものと考えられる。

炉土層解説（炉１・炉２共通）

1	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量	2	赤　褐　色	焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ50～83cmでＰ２が浅いが，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５は深さ12cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー部に位置している。長径0.75m，短径0.65mの楕円形で，深さは23cmである。底面は平坦で，壁は一部平坦面をもちながら外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	褐　色	ローム粒子・炭化粒子微量	3	褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐　色	焼土粒子・炭化粒子微量			

覆土　５層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

1	黒　色	ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量	4	暗　褐　色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗　褐　色	ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量	5	褐　色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
3	暗　褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況　土師器片95点（坩１，器台２，壺14，甕18，壺・甕類22，不明38），ミニチュア土器２点，土製品２点（土玉，支脚），二次焼成の痕跡をもつ礫片１点が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片７点も出土している。82は南コーナー部寄り，83は炉２付近，85・DP171は北東壁際の床面，DP172は炉２の炉床に置かれた状態でそれぞれ出土している。81・84・86は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期中葉である。

第31図　第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
81	土師器	小形坩	[9.8]	5.2	1.3	長石・石英	橙	普通	外・内面ヘラ磨き　体部内面ナデ　輪積み痕が明瞭	覆土中	80%
82	土師器	器台	6.9	(5.0)	－	長石・石英	橙	普通	外面・受部内面ヘラ磨き　脚部内面ナデ	床面	75%
83	土師器	甕	15.0	(7.1)	－	長石・石英	－	普通	口縁部外面ヘラナデ後ハケ目　内面ハケ目後ナデ・指頭押圧　輪積み痕が明瞭	床面	20%
84	土師器	壺	[16.8]	(3.1)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ハケ目後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き	覆土中	5%
85	ミニチュア土器	－	7.2	4.6	3.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ　内面指頭押圧　輪積み痕が明瞭	床面	100%
86	土師器	小形壺ヵ	－	(5.2)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	10%

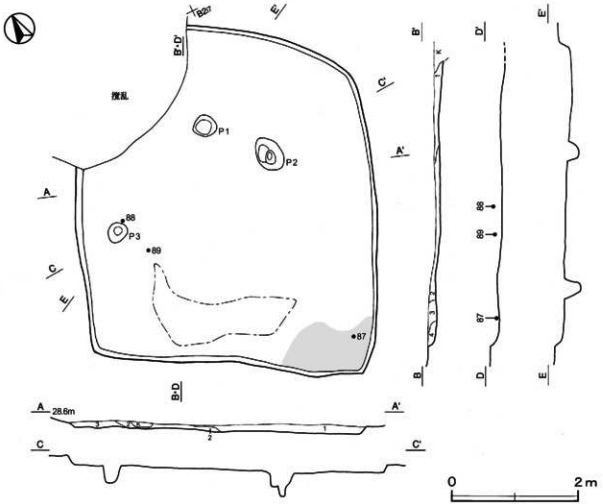
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
172	土玉	2.8	2.8	0.8	20.5	長石・石英	ナデ	床面	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
172	支脚	11.6	8.2	10.6	(606.5)	長石・石英	ナデ・指頭押圧	炉２南東	

第13号住居跡（第32・33図）

位置　調査区中央部のＢ２i6区，標高29mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.25m，短軸4.82mの不整方形で，長軸方向はＮ－27°－Ｅである。壁高は８～18cmで，外傾して立ち上がっている。



第32図　第13号住居跡実測図

床　ほぼ平坦で，南西壁寄りの一部に硬化面が認められる。南コーナー部の床面から焼土塊が確認されている。

ピット　3か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ15～35cmで，位置に規則性が認められず，性格は不明である。

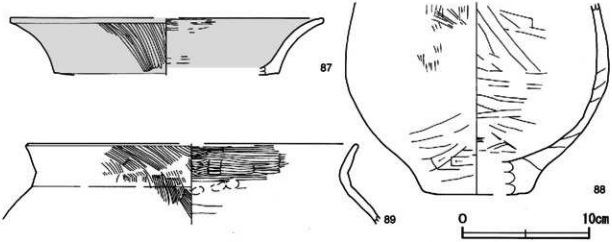
覆土　4層に分層できる。周囲から土砂が堆積した状況から自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム ブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片79点(坩ヵ２，壺２，甕35，壺・甕類４，不明36)が出土している。87は南コーナー部の床面から出土している。88・89はＰ３付近の覆土下層からそれぞれ出土しており，廃絶後まもない時期のものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から前期である。焼土塊が確認されているが，焼失住居か否かは不明である。



第33図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
87	土師器	壺	[24.7]	(4.5)	－	長石・石英・赤色粒子	－	普通	外面ヘラ磨き　内面ハケ目後ナデ　二次焼成	床面	5％
88	土師器	壺	－	(15.1)	[8.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ハケ目・ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ・ナデ　二次焼成	下層	10％
89	土師器	甕	[26.0]	(6.3)	－	長石・石英・赤色粒子・チャート	橙	普通	口縁部外面ハケ目後横ナデ　内面ハケ目　体部内面ハケ目　内面ナデ　粗面押圧	下層	5％

第14号住居跡（第34～37図）

位置　調査区中央部のＢ２e8区，標高29mの台地平坦部に位置している。

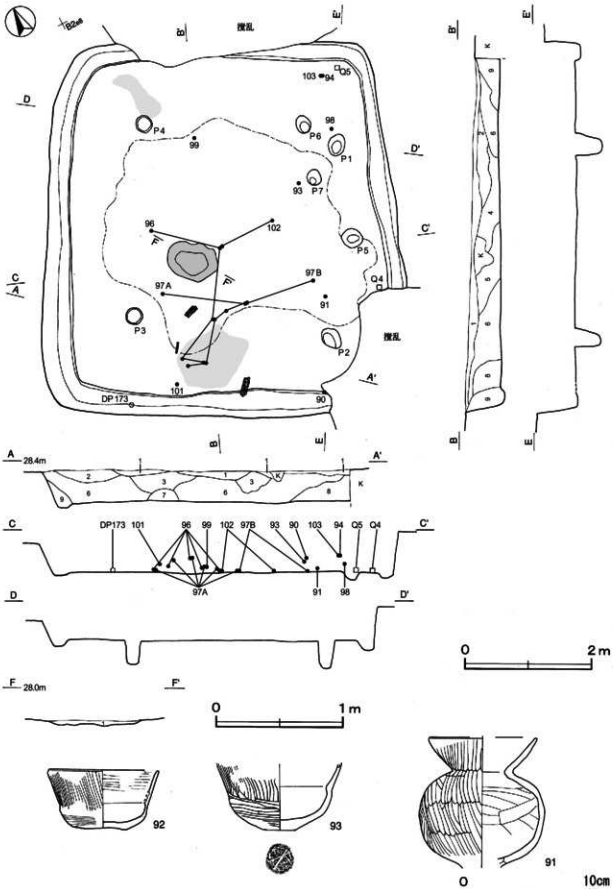
規模と形状　長軸5.81m，短軸5.75mの方形で，主軸方向はＮ－61°－Ｗである。壁高は34～64cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，柱穴の間に硬化面が認められる。壁溝が撹乱を受けている箇所以外の壁下で確認されている。北コーナー部及び南西壁寄りの床面から焼土塊と炭化材が確認されている。

炉　中央部のやや南西壁寄りに付設されている。長径0.82m，短径0.59mの不整楕円形で，床面から２～５cmくぼんだ凹凸な底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量



第34図　第14号住居跡・出土遺物実測図

ピット　7か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ37～46cmで，規模と位置から主柱穴である。Ｐ５は深さ18cmで，炉と正対する南東壁寄りの中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６・Ｐ７は深さ56cm・10cmで，性格は不明である。

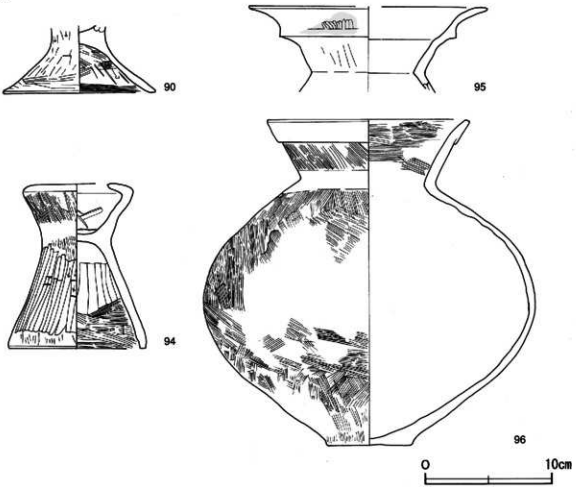
覆土　９層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。壁際の第８・９層下部に焼土ブロックが多く含まれている。

土層解説

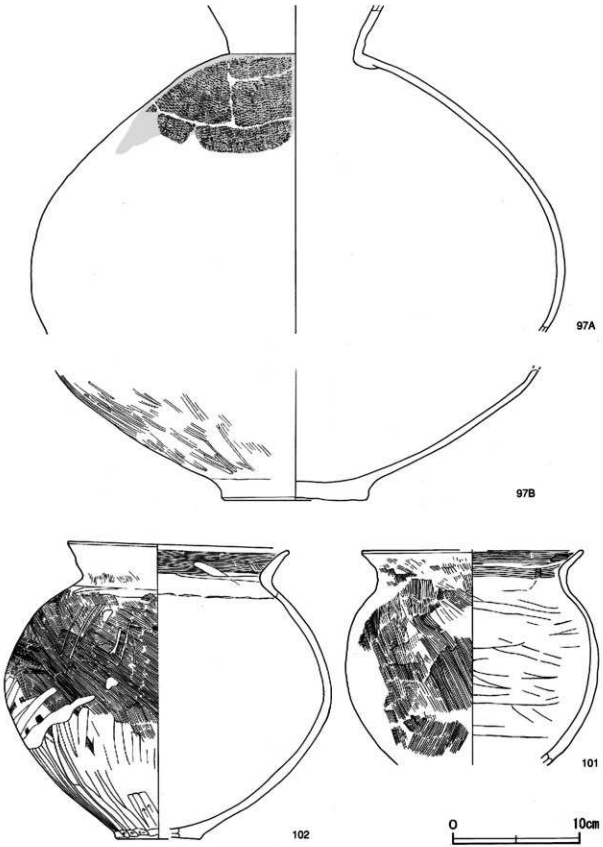
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量
5　褐　　色　ローム粒子中量
6　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック微量
8　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
9　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片888点(坩３，器台１，壺232，甕229，壺・甕類69，不明354)，土製品３点(土玉)，石器２点(敲石)が出土している。遺物の大部分は床面から覆土中にかけて散在した状態で出土している。102は中央部，DP173は南西壁際，Ｑ４は南東壁際，Ｑ５は東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。101は南西壁際，91・99は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。90は南西壁際，93は中央部，94・103は東コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。96・97Ａ・97Ｂは中央部と南西壁寄りの床面から覆土中層にかけて，広範囲に散在した状態でそれぞれ出土した破片が接合したものである。92・95・100・DP174は覆土中からそれぞれ出土している。

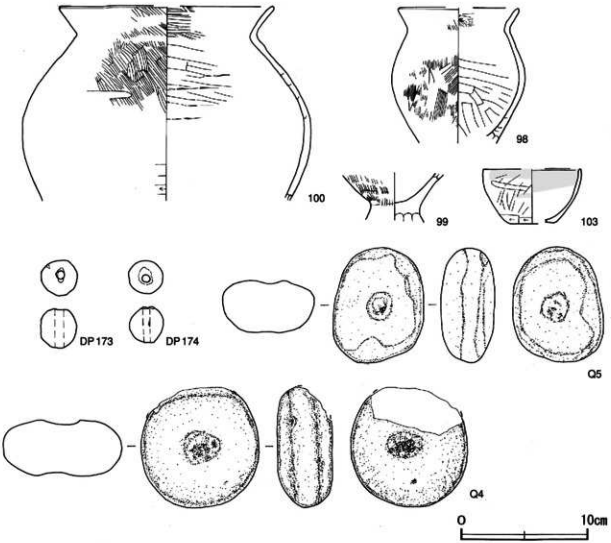
所見　時期は，出土土器から前期中葉である。床面から焼土塊や炭化材が出土いることから，焼失住居と考えられる。



第35図　第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第36図　第14号住居跡出土遺物実測図(2)



第37図　第14号住居跡出土遺物実測図(2)

第14号住居跡出土遺物観察表（第34～37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
90	土師器	高坏	－	(5.6)	12.0	長石・石英	橙	普通	脚部外面ヘラ削り後ナデ　内面ハケ目後ナデ	中層	50%
91	土師器	坩	[8.4]	(10.2)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ磨き　口縁部内面ナデ　体部内面ヘラナデ・ナデ　二次焼成	下層	50% PL.9
92	土師器	小形坩	8.6	4.8	2.7	長石・石英	橙	普通	外・内面ヘラ磨き　器面剥落　二次焼成	覆土中	60%
93	土師器	小形坩	－	(5.3)	2.2	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ磨き　内面剥落　二次焼成　底部木葉痕	中層	40%
94	土師器	甑器台	8.2	13.0	10.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	受部外面ハケ目後ナデ　内面輪積み痕が明瞭　脚部外面ヘラ削り　脚部外面ハケ目後ナデ　脚部内面ハケ目後ヘラナデ	中層	95% PL.8
95	土師器	壺	[18.6]	(6.7)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ磨き・横ナデ・ナデ　内面ナデ	覆土中	5％
96	土師器	壺	15.7	25.7	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部の折り返し部外面横ナデ　頸部～体部外面ハケ目後横ナデ・ナデ　口縁部～頸部内面ハケ目　体部内面剥落　二次焼成	床面～中層	60% PL.10
97A	土師器	壺	－	(25.9)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	肩部櫛目状燃糸文　外・内面剥落　二次焼成　97Bと同一個体	床面～中層	40%
97B	土師器	壺	－	(10.2)	11.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ磨き　内面ナデ　97Aと同一個体	床面	20%
98	土師器	甕	[9.2]	(10.6)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後ナデ　体部外面ハケ目後ナデ　内面ヘラナデ・ナデ	下層	25%
99	土師器	台付甕ヵ	－	(3.8)	－	長石・石英	橙	普通	外面ハケ目　内面ナデ　二次焼成	下層	10%
100	土師器	甕	[16.8]	(15.3)	－	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部外面ハケ目後ナデ　内面ハケ目　体部外面上半ハケ目下半ナデ　内面ナデ	覆土中	15%
101	土師器	甕	[17.5]	(17.0)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ハケ目後ナデ　内面ハケ目　体部外面ハケ目　内面ヘラナデ・ナデ	下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手　法　の　特　徴　は　か	出土位置	備考
102	土師器	甕	17.3	23.4	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ハケ目後横ナデ　体部外面上半ハケ目後ナデ下半ヘラ削り　底部周縁ヘラ削り後ナデ　内面輪積み痕が明瞭	床面	80% PL.10
103	ミニチュア土器	－	[7.8]	4.3	[3.4]	長石・石英	褐灰	普通	外面ハケ目後ヘラナデ・ナデ　内面ナデ　底部周縁ヘラ削り	中層	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　徴	出土位置	備考
DP173	土玉	2.8	3.1	0.7	24.6	長石・石英	ナデ	床面	PL.12
DP174	土玉	2.7	2.9	0.5	19.8	長石・石英	ナデ	覆土中	

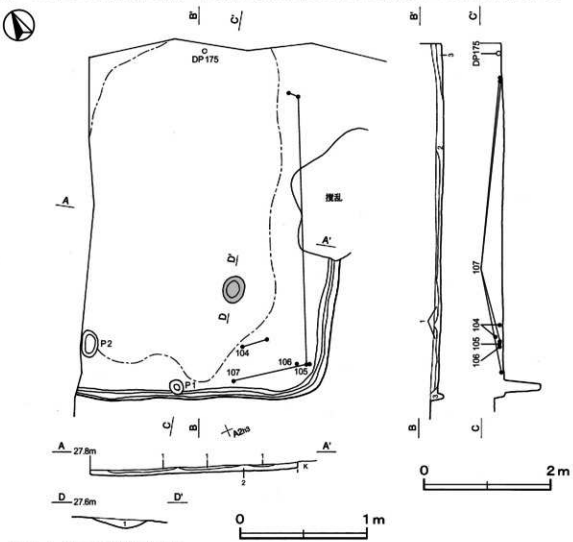
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備考
Q 4	敲石	(9.4)	9.3	4.4	(579.8)	砂岩	両面に敲打痕　側面全体に使用痕	床面	
Q 5	敲石	9.0	7.2	4.3	396.7	砂岩	両面に敲打痕　側面全体に使用痕	床面	

第15号住居跡（第38・39図）

位置　調査区北部のＡ２g3区，標高28mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　北部と西部が調査区域外に延び，また一部削平され，確認された部分は北東・南西軸5.66m，北西・南東軸3.97mだけで，形状及び主軸方向は不明である。壁高は12cmではほぼ直立し，壁溝が確認されている。

床　ほぼ平坦で，確認された部分の中央部に硬化面が認められる。壁溝が遺存する壁下に確認された。



第38図　第15号住居跡実測図

炉　中央部やや南東壁寄りに付設されている。長径0.43m，短径は0.34cmの楕円形で，床面から11cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説
1　褐　　色　焼土ブロック多量，ロームブロック中量，炭化粒子少量

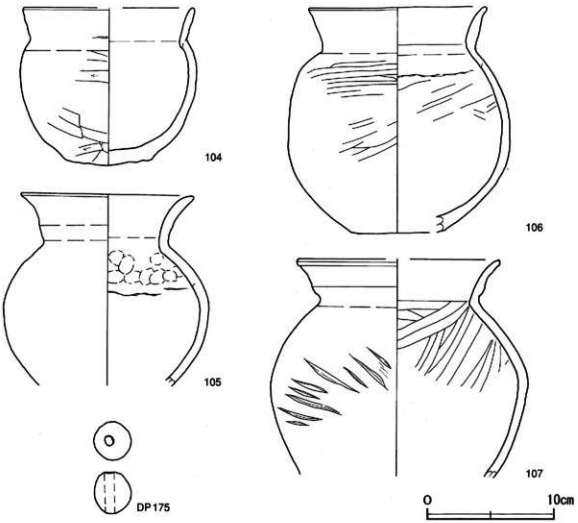
ピット　2か所。P 1・P 2は深さ58cm・17cmで，性格は不明である。

覆土　3層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片140点(甕112，不明28)，土製品1点(土玉)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片19点も出土している。104～106は南コーナー部付近，DP175は北側の調査区域際の覆土下層からそれぞれ出土している。107は南コーナー部付近と北東側の調査区域際の床面から広範囲に散在した状態でそれぞれ出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から中期である。



第39図　第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
104	土師器	甕	[13.2]	12.5	7.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	下層	25%
105	土師器	甕	13.5	(15.1)	－	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ　内面指頭押圧　輪積み痕が明瞭	下層	70% PL10
106	土師器	甕	14.0	17.7	[7.4]	長石・石英・黒雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ヘラナデ・ナデ　内面輪積み痕が明瞭	下層	80% PL9
107	土師器	甕	[15.8]	(17.1)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ　外面に断面V字形の擦痕	床面	75% PL9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP175	土玉	3.0	3.2	0.7	26.6	長石・石英	ナデ	下層	

第16号住居跡（第40図）

位置　調査区南部のC 2b7区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号溝に掘り込まれている。

規模と形状　東・南部が調査区域外に延びており，確認された部分は北東・南西軸3.04m，北西・南東軸3.30mだけで，主軸方向はN－34°－Wで，形状は不明である。確認された壁高は30～63cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，竈の前方から中央部にかけて硬化面が確認された。壁溝が遺存する壁下に確認された。

竈　北西壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで75cm，燃焼部幅42cmである。床面に粘土が薄く遺存しているのが確認され，袖部と考えられる。火床部は床面とほぼ同じ高さであり，火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

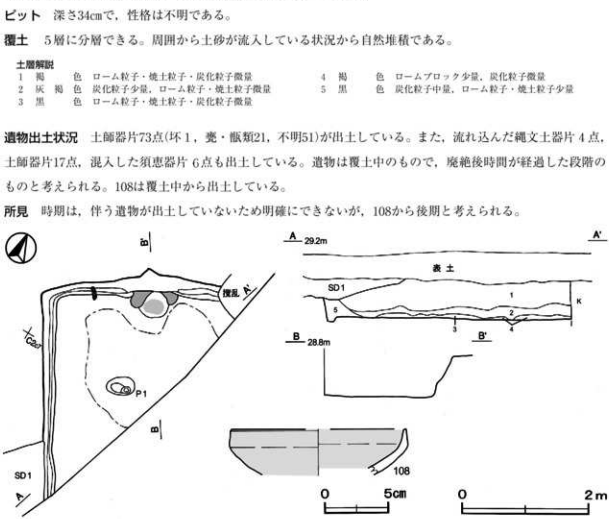
ピット　深さ34cmで，性格は不明である。

覆土　５層に分層できる。周囲から土砂が流入している状況から自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　黒　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片73点(坏１，甕・甑類21，不明51)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片４点，土師器片17点，混入した須恵器片６点も出土している。遺物は覆土中のもので，廃絶後時間が経過した段階のものと考えられる。108は覆土中から出土している。

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため明確にできないが，108から後期と考えられる。



第40図　第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
108	土師器	坏	〔13.8〕	(3.5)	－	長石・石英・赤色粒子	－	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ	覆土中	5％

第17号住居跡（第41図）

位置　調査区南部のＣ２c2区，標高29mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　南部が調査区域外に延びており，確認された部分は北東・南西軸3.15m，北西・南東軸5.18mだけで，形状及び主軸方向は不明である。確認された壁高は５～18cmで，立ち上がりは不明瞭である。

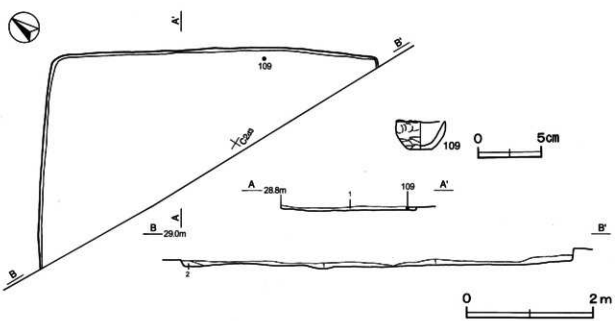
床　ほぼ平坦で，硬化面が認められない。

覆土　２層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説
1　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量　　2　暗　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片３点(壺２，甕１)，ミニチュア土器１点が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片３点も出土している。109は北東壁際の床面から出土している。

所見　時期は，出土土器が小片で少ないが，前期と考えられる。硬化面が認められず，生活の痕跡が希薄であり，住居以外の施設の可能性もある。



第41図　第17号住居跡・出土遺物実測図

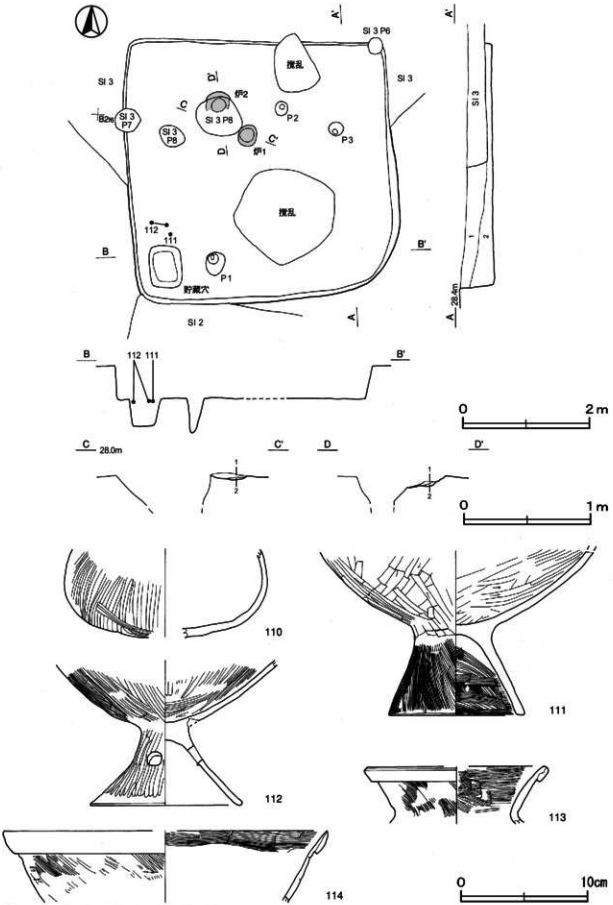
第17号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
109	ミニチュア土器	－	3.8	2.3	1.8	長石・石英	橙	普通	外・内面ナデ　外面指頭押圧	床面	95％

第18号住居跡（第42図）

位置　調査区中央部のＢ２f6区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第２・３号住居に掘り込まれている。



第42図　第18号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状　長軸4.24m，短軸4.20mの方形で，主軸方向はN－2°－Wである。壁高は11～52cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，硬化面が認められない。

炉　2か所。炉1は中央部やや北壁寄りに付設されている。長径0.34m，短径0.28mの楕円形で，床面から3～5cm凹凸にくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉2は炉1の北西側に付設されている。第3号住居に掘り込まれているため東西径0.36m，南北径は0.34mだけが確認され形状は不明である。床面から6～9cmくぼんだ底面を炉床とした地床炉である。炉床は2か所とも赤変硬化している。覆土に硬化した層がともに認められないことから，2か所とも併用されていたものと考えられる。

炉土層解説（炉1・炉2共通）
1　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量　　2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

ピット　3か所。P1は深さ53cmで，炉と向かい合う南壁に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は深さ52cm・43cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　南西コーナー部に位置している。長軸0.67m，短軸0.51mの長方形で，深さは41cmである。底面は平坦で，壁にほぼ直立している。

覆土　2層に分層できる。周囲から土砂が流入している状況から自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量　　2　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片109点（坩6，器台カ1，高坏2，壺1，甕34，壺・甕類3，甑2，不明60）が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。111・112は貯蔵穴付近の床面から出土している。110・113・114は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半である。

第18号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手　法　の　特　徴　は　か	出土位置	備考
110	土師器	坩	－	(7.0)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ磨き 内面ナデ	覆土中	40%
111	土師器	高坏	－	(12.9)	10.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	坏部外・内面ヘラ削り 脚部外・内面ハケ目後ナデ	床面	80% PL.8
112	土師器	高坏	－	(11.4)	11.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面・坏部内面ヘラ磨き 脚部内面ナデ	床面	50%
113	土師器	壺	[14.0]	(4.4)	－	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	外・内面ハケ目後ナデ	覆土中	5%
114	土師器	甑	[25.6]	(5.5)	－	長石・石英	橙	普通	外・内面ハケ目後ナデ	覆土中	5%

表3　竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主　軸　方　向	平　面　形	規模（m）長軸×短軸	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時　期
								主柱穴	出入口ピット	ピット	貯蔵穴	竈・炉			
1	B2c8	N－55°－W	方形	5.90×5.58	43～60	平坦	－	4	2	1	1	炉	自然	土師器　土玉　紡石	前期
3	B2e6	N－45°－W	方形	7.54×7.32	8～24	平坦	－	6カ	1	2	－	竈1 炉2	人・自	土師器　土玉　支脚 紡石	5世紀後葉
4A	B2g4	N－43°－W	方形	7.92×7.20	40～70	平坦	全周カ	4	2	2	2	炉	自然	土師器　ミニチュア 土器　土玉	前期前葉
4B	B2g4	N－43°－W	方形	(5.70)×(5.25)	－	平坦	全周	4	1	－	－	炉	－	－	前期前葉
5	B2f2	N－50°－W	方形	5.30×4.98	15～36	平坦	－	4	1	－	1	竈	自然	土師器	6世紀前葉
6A	A2j9	N－35°－E	方形	7.34×7.04	50～102	平坦	部分	4	1	1	1	竈	自然	土師器　須恵器 土玉	5世紀末葉～6世紀初頭
6B	A2j9	N－35°－E	方形	(6.52)×(6.10)	－	平坦	－	4	1	－	－	竈	－	－	5世紀末葉～6世紀初頭
7	A2b7	N－25°－E	方形	6.27×6.15	40～60	平坦	部分	4	1	1	1	竈	人為	土師器　須恵器 土玉　石製紡錘車	5世紀後葉

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）長軸×短軸	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	内部施設 出入口ピット	内部施設 ピット	内部施設 貯蔵穴	内部施設 竈・炉	覆土	主な出土遺物	時期
8	B2a0	－	－	4.98×(3.86)	43～78	平坦	－	－	－	3	－	炉	自然	土師器　須恵器	5世紀後葉～5世紀末葉
9	B1i0	N－41°－W	方形	4.88×4.82	6～14	平坦	－	－	－	2	－	炉	人為	土師器　ミニチュア土器　土玉　砥石	前期前半
10	B2e1	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	炉	－	土師器	前期
12	B1i8	N－37°－W	長方形	5.38×4.84	8～18	平坦	－	4	－	1	1	炉	自然	土師器　ミニチュア土器　土玉　支脚	前期中葉
13	B2i6	N－27°－E	不整方形	5.25×4.82	8～18	平坦	－	－	－	3	－	－	自然	土師器	前期
14	B2e8	N－61°－W	方形	5.81×5.75	34～64	平坦	全周a	4	1	2	－	炉	人為	土師器　土玉　敲石	前期中葉
15	A2g3	－	－	(5.66)×(3.97)	12	平坦	部分	－	－	2	－	炉	－	土師器　土玉	中期
16	C2b7	N－34°－W	－	(3.30)×(3.04)	30～63	平坦	部分	－	－	1	－	竈	自然	土師器	後期
17	C2c2	－	－	(5.18)×(3.15)	5～18	平坦	－	－	－	－	－	－	－	土師器　ミニチュア土器	前期
18	B2i6	N－2°－W	方形	4.24×4.20	11～52	平坦	－	－	1	2	1	炉	自然	土師器	前期前半

（2）土坑

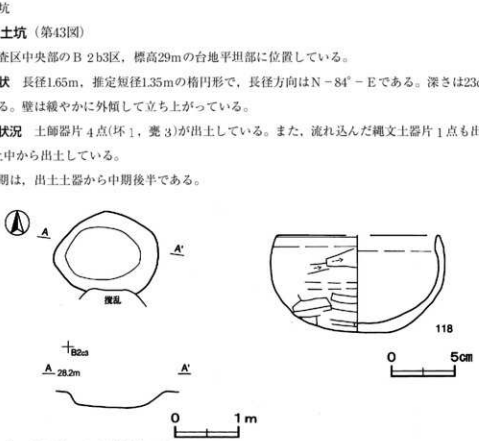
第６号土坑（第43図）

位置　調査区中央部のＢ２b3区，標高29mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径1.65m，推定短径1.35mの楕円形で，長径方向はＮ－84°－Ｅである。深さは23cmで，底面は平坦である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況　土師器片４点(坏１，甕３)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片１点も出土している。118は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後半である。



第43図　第６号土坑・出土遺物実測例

第６号土坑出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
118	土師器	坏	[12.8]	7.8	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	覆土中	55%

3　平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第2号住居跡（第44・45図）

位置　調査区中央部のB2g6区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第18号住居跡を掘り込んでいる。

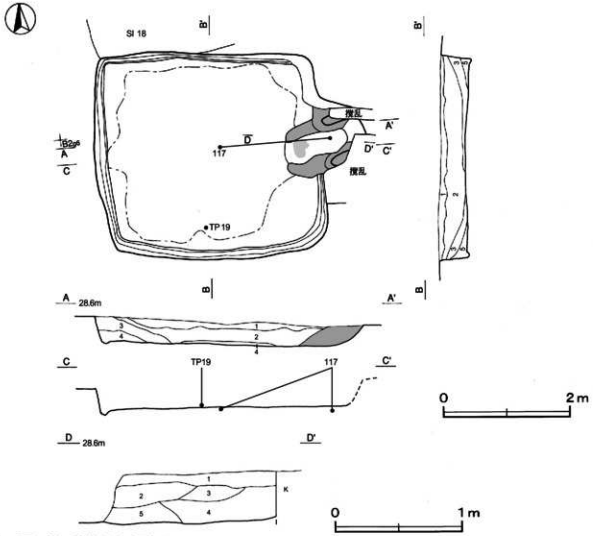
規模と形状　長軸3.54m，短軸3.26mの方形で，主軸方向はN－96°－Eである。壁高は36～40cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，壁際まで硬化面が認められる。

竈　東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132cm，燃焼部幅39cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に粘土で構築されている。火床部は床面と同じ高さであり，火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ74cm掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム・ブロック・焼土粒子微量
2　極暗褐色　ローム・ブロック少量，焼土ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム・ブロック中量，焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム・ブロック少量，粘土粒子微量
5　褐　　色　ローム・ブロック中量，焼土粒子微量



第44図　第2号住居跡実測図

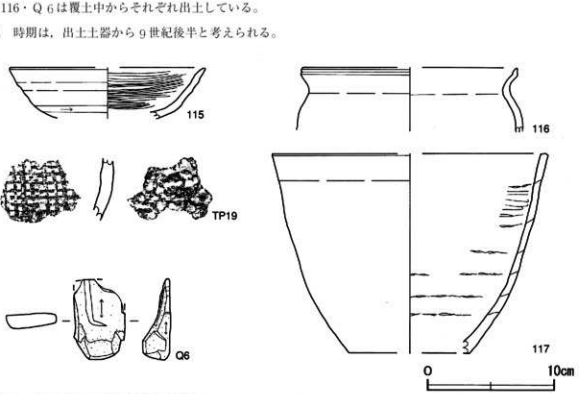
覆土　5層に分層できる。周囲から土砂が流入している状況から自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片398点(坏5，椀2，甕10，甑21，甕・甑類139，不明221)，須恵器片3点(甕)，石器1点(砥石)が出土している。また，流れ込んだ縄文土器片10点，土玉2点も出土している。117は竈の火床部と中央部の床面からそれぞれ出土した破片が接合したものである。TP19は南壁寄りの床面から出土している。115･116・Q6は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から9世紀後半と考えられる。



第45図　第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
115	土師器	坏	[15.4]	(4.0)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土中	15%
116	土師器	甕	[17.0]	(5.0)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外・内面ナデ	覆土中	10%
117	土師器	甑	[21.6]	15.7	[9.6]	長石・石英・赤色粒子・黒雲母	浅黄色	普通	外・内面横ナデ　内面一部ヘラ磨き　輪積み痕が明瞭	竈火床面・床面	40%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
TP19	須恵器	甕	長石・石英	浅黄橙	普通	格子目叩き　内面剥落	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備考
Q6	砥石	6.3	4.1	2.2	(46.3)	凝灰岩	砥面4面	覆土中	

4　その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから，時期を明確にできない道路跡１条，溝跡１条，土坑15基が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

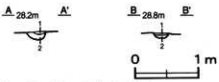
(1) 道路跡

第１号道路跡（第３・46図）

位置　調査区中央部のＢ１d0～Ｃ２a7区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４Ａ・Ｂ・10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　路面は長さ41mほど，幅90cmほどの範囲に部分的に確認され，北西方向(Ｎ－58°－Ｗ)へ直線状に延び，調査区域外に延びていたものと推測される。溝状の掘り込みを利用したものと考えられ，深さ８～12cmの掘り込みが遺存している。



第46図　第１号道路跡実測図

覆土　２層に分層できる。硬化しており，溝状の掘り込みに堆積した土砂が踏み固められたものと考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量　　2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

所見　時期は，重複関係から古墳時代前期より新しいが，遺物が出土していないため明確にできない。

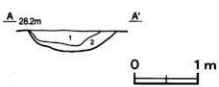
(2) 溝跡

第１号溝跡（第３・47図）

位置　調査区南部のＣ２c7～Ｃ２e5区，標高29mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第16号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　確認された長さは11.54mで，北東方向(Ｎ－40°－Ｅ)へ直線状に延び，北側は調査区域外に至っている。南端は撹乱のため不明である。上幅1.16～1.48m，下幅0.42～0.60m，深さ31cmである。断面形は逆台形状で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。



第47図　第１号溝跡実測図

覆土　２層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

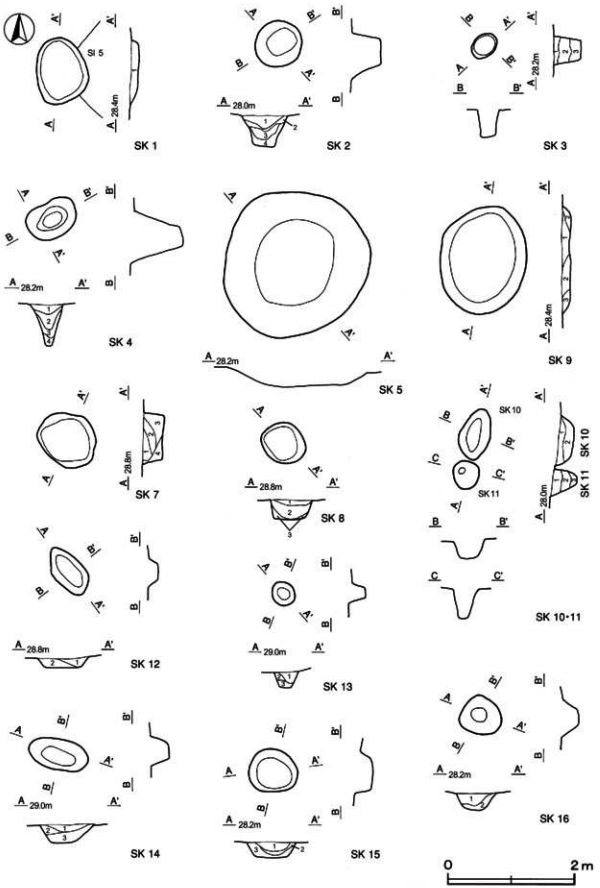
土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量　　2　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　縄文土器片３点(不明)，土師器片24点(甕)，磁器片１点(不明)が出土している。摩滅した細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から古墳時代後期より新しいが，伴う遺物が出土していないため明確にできない。また，性格も不明である。

(3) 土坑（第48図）

時期・性格ともに不明な土坑15基については，規模・形状等について実測図と一覧表を掲載する。



第48図　その他の土坑実測図

第1号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第2号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　褐　　色　ロームブロック少量

第3号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子微量

第4号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ロームブロック少量

第7号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量
2　赤　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量

第8号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第9号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第10号土坑土層解説
1　にぶい褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　にぶい褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第11号土坑土層解説
1　明　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第12号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量

第13号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第14号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第15号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子多量

第16号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

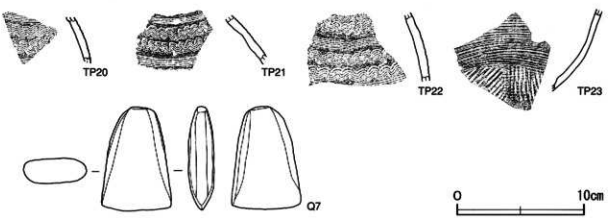
表4　土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模（m） 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
1	B2g1	N－20°－W	楕円形	1.00×0.80	12	外傾	平坦	自然	－	SI 5→本跡
2	B2e6	－	円形	0.77×0.72	48	外傾	平坦	自然	土師器	
3	B2c5	N－42°－E	楕円形	0.45×0.33	43	直立	平坦	自然	縄文土器	
4	B2c5	N－60°－E	楕円形	0.82×0.55	80	外傾	平坦	自然	土師器	
5	B2e4	－	円形	2.35×2.25	30	緩斜	平坦	－	－	
7	B2j1	N－75°－W	不整楕円形	0.90×0.73	42	外傾	平坦	自然	土師器	
8	B2j2	N－43°－W	楕円形	0.68×0.60	40	外傾	平坦	自然	－	
9	C1a0	N－15°－E	楕円形	1.74×1.39	14	外傾	平坦	自然	－	
10	B2a9	N－15°－E	不整楕円形	0.81×0.47	29	外傾	平坦	自然	土師器	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模（m） 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
11	B2j9	－	円形	0.44×0.43	46	外傾	皿状	自然	－	
12	C2a6	N－36°－E	不整楕円形	0.84×0.46	16	外傾	平坦	自然	－	
13	C2a6	N－43°－W	楕円形	0.38×0.34	24	外傾	平坦	自然	－	
14	C2b5	N－75°－W	楕円形	0.95×0.48	31	外傾	平坦	自然	縄文土器	
15	B1e0	N－68°－E	楕円形	0.75×0.68	25	外傾	平坦	自然	－	
16	B2e2	－	円形	0.64×0.59	28	外傾	平坦	自然	土師器	

（4）遺構外出土遺物（第49図）

遺構に伴わない遺物のうち，特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第49図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP20	弥生土器	壺	長石・石英	明赤褐	普通	櫛歯状工具（4本）による横走文の区画内に櫛描波状文（7本櫛歯）	表土中	
TP21	弥生土器	壺	長石・石英	橙	普通	櫛歯状工具（5本）による横走文の区画内に櫛描波状文（6本櫛歯）	SI 3 覆土中	
TP22	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	普通	櫛歯状工具（6本）による横走文の区画内に櫛描波状文（6本櫛歯）	SI 14 覆土中	
TP23	須恵器	壺	長石	灰	普通	格子目叩き後カキ目	表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q7	磨製石斧	8.2	5.5	2.0	149.8	蛇紋岩	両刃　全面研磨	SI 1 覆土中	

第4節　ま　と　め

今回の調査で，縄文時代前期中葉の住居跡と地点貝塚，古墳時代前期，中期から後期の住居跡，平安時代の住居跡などが確認された。ここでは，確認された遺構が一番多い古墳時代を中心に，調査の成果を記述する。

1　縄文時代

第11号住居跡から出土した土器は，文様や胎土などの特徴から縄文時代前期中葉の黒浜式土器と考えられ，本住居跡はこの時期に帰属するものである。住居廃絶時に食料であった貝の殻が廃棄され，5か所の貝層範囲に分かれる地点貝塚が形成されている。廃棄された貝は，マガキ，ハマグリ，カガミガイ，ウネナントマヤガイ，アカニシ，ウミニナ，アサリィの鹹水種が中心である。ウネナントマヤガイは気候が温暖な時期の貝であり，貝の組成は，前期の貝塚における一般的な貝の組成と考えられる[11]。淡水種のマシジミが混じっているが，ごく少量のため採集の主な対象にはなっていなかったものと考えられる。前期中葉の時期は縄文海進時であり，海水が平野部まで進入していた時期である。当遺跡周辺にも貝塚が数多く確認されており，貝を採集し，食料としていた生活がうかがわれる。

2　弥生時代

後期の土器片が，古墳時代前期以降の遺構の覆土に流れ込んで出土している。このような状況から，今回の調査区域からは確認されていないが，調査区域の周辺に弥生時代後期の集落が形成されていた可能性がある。

3　古墳時代

住居跡は，前期10軒，中期4軒，後期4軒が確認されている。

前期では，第4A号住居跡が焼失住居で，遺存状態の良好な複数の器種の土器が出土している。床面から出土している焼失時のものと人為堆積の埋土中から出土した土器群は，その出土状況から同時期のものと考えられ，ともに本住居に伴うものである。これらの土器群のうち，坩・器台・高坏・甕を検討し時期について考えてみる。

坩は定型化した精製の小形丸底坩が出土していない。器台は精製の小形器台で，口縁部端の形状に違いや脚孔の有無が認められるが，すべて脚部が屈曲し裾部で広がっている。高坏は元屋敷系（第11図－29），元屋敷系とは異なるもの（第11図－27・28）が出土している。27・28は坏部が深く高さがあるのに対し，脚部は短く，坏部との接合部が太いのが特徴である。このような器形は，在地の弥生時代後期後半の高坏にみられ，土浦市根鹿北遺跡第2号住居跡[5]，原田北遺跡第14・78号住居跡[6]，原田西遺跡第4号住居跡[8]，原出口遺跡第18号住居跡[10]などから出土している。27・28は，前代の在地の高坏からの系譜と考えられる。甕は，口縁部がすべて単口縁でくの字を呈する平底甕で，台付甕や口縁部端に刻み目が施されているもの，押捺によって波状を呈するものは出土していない。口縁部外面の輪積みの痕跡をもつものは少数ながら出土している。器面の調整はハケ目調整を主体で，それにヘラナデ，横ナデ，ナデが加わるもの，ヘラナデ，ナデ，ヘラ削りが主体となってハケ目調整が補助的に施されているものなどが出土している。常陸・下総地域における弥生時代から古墳時代への土器様相の転換の中で甕は，南武蔵地域・東京湾西岸地域からの影響，それに上総地域からの影響が加わり，最終的に上総地域の影響が主体をなしており[6][7]，本住居跡から出土している甕もその特徴から上総地域に系譜を求めることができる。

本住居跡出土の土器群は，小形器台，元屋敷系の高坏は存在しているが，定型化した精製の小形丸底坩

がまだ加わらない段階である。この段階の土器の細分については，上総地域の千葉県市原市にある草刈遺跡・古墳群の出土土器をもとに組まれた草刈編年[8][9]に準拠すると，本住居出土の口縁部が単口縁でくの字の平底甕の特徴から，草刈編年のⅡ期前半に該当する。Ⅱ期(前半・後半)の開始を前期とし，4世紀第一四半期とされていることから古墳時代前期前葉と考えられる。

確認された古墳時代前期の住居跡では，第4A号住居跡が最も古い。第4A号住居跡の床面からは，土玉が150点出土している。土玉には二次焼成の痕跡がみられるものが多くあり，住居の焼失時のものと考えられる。土玉については，両開孔部にみられる同一方向に偏って磨滅している痕跡が，現在霞ヶ浦で使用されている土錘の開孔部端の磨滅との類似していることから，漁網に装着され負荷がかかる状況で引きずられた可能性[10]と実用品ではなく祭祀具の可能性がある[11]。本住居跡出土の土玉は，片方の開孔部にのみ磨滅の痕跡をもつものが少数確認できるが，両方の開口部にはみられない。比較的表面や開孔部に摩滅した痕跡がみられないことが指摘できる。

中期の第3・7号住居跡から出土している坏は，赤彩されているものもみられ，平底と丸底がともに出土しており，全体の器形から樫村宣行氏編年のⅢ期に該当し，5世紀後葉と考えられる[12]。第3・7号住居跡の竈は，それぞれ北東壁・北西壁の中央部から離れた床面に，粘土を馬蹄形に盛り上げて構築されており，5世紀後葉が本遺跡における竈の導入期と考えられる。やや時期が下る5世紀末葉から6世紀初頭の第6A号住居跡も，同じ竈の構造である。この導入の時期は，第3号住居跡のように炉を併用している住居跡も確認されている。一方，5世紀末葉から6世紀初頭の第8号住居跡は，竈ではなく炉を使用している住居跡である。当遺跡は5世紀後葉に竈が導入されているが，ある期間は炉を使用する住居と併存している。

以上，古墳時代前期前葉の第4A号住居跡と5世紀後葉から6世紀初頭の住居跡における竈の付設時期について述べてきた。遺跡の一部ではあるが調査され，具体的な資料が得られたことは，当地域の歴史を知る上で貴重な成果と考えられる

註

1）貝の同定は，国立歴史民俗博物館考古研究部教授の西本豊弘氏に依頼し御教示頂いた。
2）関口滴　福田礼子　吉沢悟　日高慎「根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書」「土浦市今泉雲間拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書」土浦市遺跡調査会　1997年3月
3）緑川正實　海老澤稔「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原田北遺跡，原田西遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第80集　1993年3月
4）註3文献と同じ
5）江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　原田口遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第94集　1995年3月
6）比田井克仁「下総地域の主体性」「法政考古学」第21集　法政考古会　1995年3月
7）比田井克仁「古墳時代前期における関東土器圏の北上」「史館」第33号　史館同人　2004年5月
8）加藤修司「第1章　土器編年案」「千葉県文化財センター研究紀要21」　財団法人千葉県文化財センター　2000年9月
9）田中裕「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第11集　特集古墳時代中期の諸様相　帝京大学山梨文化財研究所　2003年3月
10）中村哲也「野中遺跡　第2次調査報告書」「美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告」8　茨城県稲敷郡美浦村教育委員会　2000年3月
11）瓦吹堅「土玉覚え書」「史峰」第34号　新進考古学同人会　2006年6月
12）樫村宣行　土生朗治　白石真里「茨城県における5世紀の動向」「東国土器研究」第5号　東国土器研究会　1999年5月

参考文献

古墳時代土器研究会「土器が語る－関東古墳時代の黎明－」第一法規出版株式会社　1997年5月
比田井克仁「関東における古墳出現期の変革」雄山閣出版　2001年7月

写　真　図　版

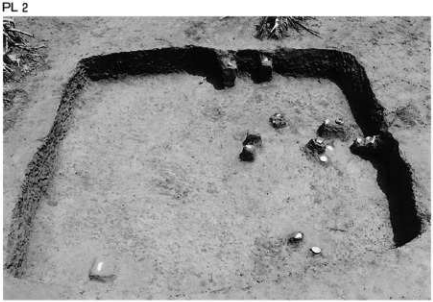
調査全景

第11号住居跡
完　掘　状　況

第1号地点貝塚
確　認　状　況

第1号住居跡
遺物出土状況

PL 2



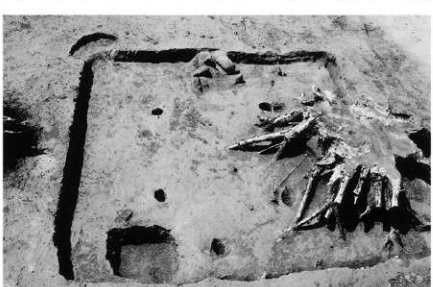
第 2 号住居跡
遺物出土状況

第 3 号住居跡
完　掘　状　況

第 4 A 号住居跡
完　掘　状　況

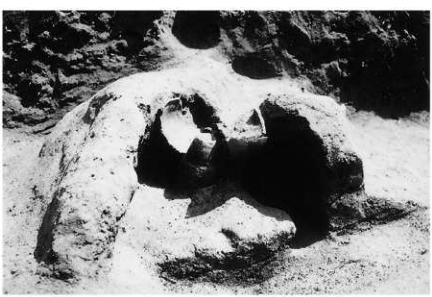
第４Ａ号住居跡
遺物出土状況(1)

第４Ａ号住居跡
遺物出土状況(2)



第５号住居跡
完　掘　状　況

第６Ａ号住居跡
完　掘　状　況



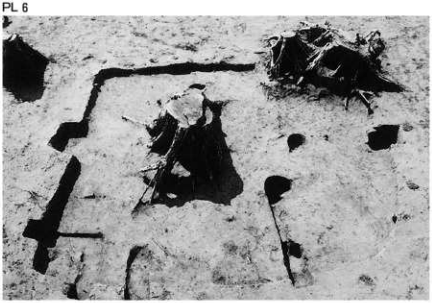
第６Ａ号住居跡竈
遺物出土状況

第７号住居跡
完　掘　状　況

第 7 号住居跡
竈遺物出土状況

第 8 号住居跡
完　掘　状　況

第 12号住居跡
遺物出土状況



第13号住居跡
完　掘　状　況

第15号住居跡
遺物出土状況

第16号住居跡
完　掘　状　況

SI 3-10

SI 3-9

SI 3-11

SI 3-12

SI 3-16

SI 5-52

SI 6A-57

SI 6A-61

SI 7-66

SI 8-72

出土遺物(1)

SI 4A-27

SI 4A-28

SI 4A-29

SI 18-111

SI 4A-22

SI 7-70

SI 14-94

SI 4A-31

出土遺物(2)

SI 4A-20

SI 4A-30

SI 14-91

SI 4A-45

SI 1-91

SI 6A-60

SI 15-106

SI 15-107

出土遺物(3)

SI 9-75

SI 4A-46

SI 15-105

SI 14-102

SI 4A-36

SI 14-96

SI 4A-37

SI 4A-47

出土遺物(4)

SI 4A-32

SI 4A-51

SI 19-77

SI 4A-DP6～DP155

SI 1-DP1

SI 3-DP3

SI 3-DP4

出土遺物(5)

SI 6A-DP156

SI 6A-DP157

SI 7-DP158

SI 7-DP159

SI 7-DP160

SI 7-DP161

SI 7-DP162

SI 7-DP163

SI 7-DP165

SI 7-DP166

SI 7-DP167

SI 8-DP169

SI 9-DP170

SI 12-DP171

SI 4A-DP173

抄　　録

ふ り が な	ひがしまえいせき
書　　名	東前遺跡
副　書　名	主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第318集
著　者　名	早川麗司　作山智彦
編　集　機　関	財団法人茨城県教育財団
所　在　地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　ＴＥＬ029－225－6587
発　行　日	2009(平成21)年３月23日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
東前遺跡 (ひがしまえ)	茨城県稲敷市 大字時崎字東前 605番地ほか (いばらきけん いなしきし おおあざ ときさき あざ ひがしまえ)	08229 － 441047	32度 57分 09秒	129度 56分 54秒	28m ～ 29m	20070402 ～ 20070531	3,340㎡	主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東前遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　1軒 地点貝塚　1か所	縄文土器(深鉢)，貝(マガキ・ハマグリ・カガミガイ・ウネナントマヤガイ・アカニシ・ウミニナ・アサリ・カマシジミ)	縄文時代前期中葉の第11号住居跡には，廃絶後すぐに廃棄されたと考えられる地点貝塚が形成されている。 古墳時代前期前葉の第４Ａ号住居跡からは，土玉が150個一括して出土している。
		古墳	竪穴住居跡　18軒 土坑　1基	土師器，須恵器，ミニチュア土器，土製品(土玉・支脚)，石器(敲石・砥石)，石製品(紡錘車)	
		平安	竪穴住居跡　1軒	土師器，須恵器，石器(砥石)	
	その他	時期不明	道路跡　1条 溝跡　1条 土坑　15基	縄文土器，土師器，磁器	

要　　約	当遺跡は，縄文時代前期中葉，古墳時代前葉から中葉，中期後葉から後期前葉と集落が営まれていることが確認された。古墳時代中期後葉には竈が導入されており，炉から竈への転換の時期である。

茨城県教育財団文化財調査報告第318集

東 前 遺 跡

主要地方道江戸崎新利根線バイパス建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21(2009)年3月18日　印刷
平成21(2009)年3月23日　発行

発行　財団法人茨城県教育財団
〒310-0861　水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587

印刷　有限会社 クリエイティブサンエイ
〒311-4302　茨城県東茨城郡城里町那珂西1879－5
TEL　029－288－7778